
命刻々～白き焰と黒き雷～

獅子面童子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命刻々〜白き焰と黒き雷〜

【Nコード】

N3082N

【作者名】

獅子面童子

【あらすじ】

人間が滅び、ポケモンが生きる仮想世界。そこでは幾度も戦争が起こっていた。
レントラーの少年、ルクルスは、ひよんな事から王国の騎士団に入ってしまう。

だが、この事から国の未来が変わっていく……

プロローグ

魔獣、ポケモンとも言われるその生物は特別な力を使い、経験を積む事で別の姿に変化する。

だが、それは人間の脅威にもなり得る。だから人間は兵器を用いてポケモンを根絶しようとした。

そして、ポケモンと人間の間で戦争が起こった。数々のポケモンや人間が血を流し、命を散らした。

戦争は何年も、何十年も、何百年も続いた。

そしてある日、戦争は終わりを告げた。ポケモン達が勝ち、人間はこの世界から消え去った。

こうして、ポケモンだけの世界が出来た。

その後、世界はいくつもの国に別れ、何百年も続いた戦争は終わりを告げた。

それから約300年の月日が経った。国王ノグ「ラグーア」が治める東の国「ラグーア」では二つの宝玉が見つかるが、その事がきっかけとなり、世界全土をも巻き込むことになる大戦争が起ころうとしていた……。

第1話 雷獅子の少年

東の小国ラグーアの首都圏最北端に位置する街、ラドイルシティ。別に一般人が買えないような物件やも無く、それなりの金があれば中学生でもマンションで1匹暮らしができる程である。

午前6時28分、そんな街の駅の3番ホームで1匹、ずっと次の機関車が来るのを待っている少年がいた。その体毛と鬣は黒く、黄色い眼をした獅子のようなポケモン、レントラー。そのレントラーの少年はネルシャツとジーンズを身に着けており、眠そうに欠伸をしていた。

「もうそろそろかな、首都行きの列車。」

レントラーの少年が独り言を言いつつ待っていると、真っ白に染まったボディの機関車がホームに入ってきた。機関車のドアが開き、中から乗客達が出ていき、殆どが空きの席の一番端にレントラーの少年は座った。それから直ぐ機関車のドアが閉まり、プオーと、汽笛を鳴らし機関車が出発した。

車内は外見とは違い、黒をベースとしたデザインであった。

汽車が出発してから約1時間が過ぎた。レントラーの少年は暇そうに窓の外を眺めていた。別にやる事が無いわけではないのだが、レントラーの少年はずっとそうしていた。

「やつほー、ロメパン！」

と、後ろから声を掛けられ、レントラーの少年はハッとして振り返った。

そこには、真っ黒な体毛で頭や四肢に黄色の輪のような模様がある犬？のようなポケモン、ブラッキーの少女が空色のワンピースを着て立っていた。

「って、俺の名前はロメパンじゃない！ルクルスⅡヴァロンっていうちゃんとした名前があるんだよ！ファイナルⅡティナータ！」

ルクルスはファイナルというブラッキーに怒鳴りつけるとムスツとし

てそっぽを向いた。

「はいはいそうですか。それはいいとして、もう直ぐ首都に着くからね。集合場所、覚えてる？」

「・・・ラグーア国際ホールだろ。大丈夫だよ。」

「あつそ。ならいいけれど。じゃーね、ルツ君。」

そう言い残してフィナルはほかの車両へと移動した。

それからまもなくして、

『まもなく～首都ラグーアシティ～』

と、アナウンスが流れ、汽車が停まり車両のドアが開いた。ルクルスは荷物を持って汽車から降りた。

「うゝん、着いたあ。」

ルクルスが背筋を伸ばして軽くリラックスしていた。だが、その後でルクルスを睨んでいる者がいることにルクルスは気づいてはいなかった。

第1話 雷獅子の少年（後書き）

作「と、いうわけでとりあえず1話目終了です！」

ル「おい！（怒）」

作「ん？どうした、ルクルス。」

ル「どうしたもこうしたも、何か、短くないか？」

作「いや、だいたい1話ってこんなのじゃないですか？まあ、次からは少しずつ増やしていくかも。」

ル「・・・嘘だ、絶対。」

作「と、とりあえず応援よろしくお願いいたします。」

第2話 潜む影（前書き）

作者「あ、ちなみにこの小説のポケモンは伝説、幻を除いてみんな二足歩行です。」

第2話 潜む影

首都ラグーアシティ。王国の首都であり、街の周りには「ホエル
オー・ウォール」という巨大な壁が首都を囲っている。街の中央に
は王国全体を見渡せる程高いタワーがある。

「と、いうわけで首都に來たけれど・・・ここはど、どの辺りだろ
う?」

ルクルスはそんな首都で早速道に迷っていた。

「ううゝ、こんな事になるならフィナルと一緒に行けばよかったあ
ゝ!」

そう言ったとしても時既に遅し。ルクルスはもうパニックしていた。
「・・・お前、大丈夫か?」

すると後ろから誰かが話し掛けてきた。紺色の肌で鯨のようなポケ
モン、ガバイトだ。そのガバイトはいかにもチャラ男みたいな格好
をしていてギターケースを背負っていた。年齢はルクルスと同じぐ
らいだろう。

「え?・・・ああ、その・・・道に迷ってしまったて・・・。」

「ああ、それであんなにパニックしていたのか。まあいいや、道案内
してやるよ。で、どこに行きたいんだ?」

ルクルスはとりあえず道案内して貰うことにした。

「えっと、首都国際ホールです。」

「ん、わかった。付いて来い!」

ガバイトの道案内はとても丁寧だった。しかも首都の人気スポット
も教えてくれた。

「さて、着いたぞ。ここが首都国際ホールだ。」

「おお、ここかあ。有難う、色々と。」

「まあいいって。またどこかで会おうぜ、ルクルス!! ヴァロン。」
と、言い残してガバイトは去っていった。

「あれ? 俺の名前教えたっけなあ? まあ、いいか。」

ルクルスは疑問を抱えつつ、ホールの中へ入っていった。

だが、そこにはロビーの横で異様な殺気が漂っているファイナルがいた。

「あ、ゴメンファイナル。遅れちゃったあ……。」（苦笑）

「……………あくのは「ヤメロー！わかったからやめてくれい！」」

- - - 数分後 - - -

「んじゃ、もうそろそろ行くか。」

「うん！」

何があつたのか二人は仲直りをしていた。

首都国際ホール。そこでは人気ソロミュージシャン、ラフス「ユークツのライブが行われていた。ルクルスは偶然そのペアチケットを手に入れ、ファイナルと一緒に来ていたのだ。

「キヤー！！ラフスさん！！」

「随分張り切ってるなあ、ファイナル。」

少々呆れ気味のルクルスであつたが意外とライブを満喫していた。

そして、ライブが終わった。

「いやあ最高だったね、ルツ君はどうだった？」

「ん？ああ、よかったな。」

「……………まあいいや。じゃ私は先に帰るからね、また明日学校でね！」

「ああ、また明日。」

ファイナルが見えなくなるまでルクルスは手を振っていた。誰もいなくなった駅前の広場でルクルスは横を睨んでいた。

「……………お前か？俺の事を駅のホームからずっと付いて来てるのは姿を現せ！」

すると、木の裏からすつと何者かが出てきた。

「見事だ、気づいていたのか。」

そこには蒼い狼のようで、腕に棘のようなものが付いているポケモン、ルカリオがいた。質素な着物を着ているその姿は侍を思い浮か

ばせる。

「で、何の用だ。コスプレ野郎。」

「お前をラグーア騎士団に入れるために来た。ちなみにこれはコスプレではない。」

「は？何でそんなモンに入らないと・・・」

ルクルスは話している途中でその場に倒れた。ルカリオが睡眠ガスを使ったのだ。

「ミッション・コンプリート
任務完了」

ルカリオはそう呟くと、ルクルスを担ぎ上げてどこかへ連れ去って行った。

第3話 偶然という名の謀

「ううーん、ここは・・・一体何所だ？」

ルクルスが目覚めた場所はまるで病院の一室のようであった。すると、ガラツと病室？のドアが開き、誰かが入ってきた。

「あら、目覚めたのね。気分はどうかしら？」

入ってきたのはピンク色で、背中には白くて小さな羽が付いていて、何だか卵みたいなのを腹にあるポケットらしき物に入れたポケモン、ハピナスであった。そのハピナスはナース服を着ていて、沢山のオボンの実が入った籠バスケットを持っていた。

「・・・あの、どちら様でしょうか？ついでに此処は何所ですか？」
何が何だか分からないルクルスはそのハピナスに聞いた。

「え？ああ、忘れていたわ。えーと、私はラグーア騎士団医療班所属、ホムーレ^{II}ファジュ。で、ここは そのラグーア騎士団本部地下3階の、医療室よ。」

「あ、そうですか。僕はルクルス^{II}ヴァロンといいます。へえ、ラグーア騎士団ですかー、ん、騎士団？・・・あー！ラグーア騎士団つてたしかあのコスプレルカリオが言つて」

「だからコスプレでは無い！」

ルクルスが言い終わる前にドアの方から怒鳴り声が聞こえた。そこには、ルクルスを連れ去ったルカリオが立っていた。

「あ！あの時のコスプレイヤーー。」

「・・・ま、その様子ならもう大丈夫であろう。後で地下5階の訓練場まで来い。絶対に来い、クソガキ！」

そう言うルカリオは立ち去って行った。

「何なんだよ、アイツ。」

「ま、昔からああだからね。色々。ルクルス君とは合わないかもしれないけど頑張つてね！」

「頑張つて？何を頑張れと・・・あのファジュさん、何ですかコレ

？」

「何って・・・竹刀だけど。それじゃ、精々死なないようにね。後、此処の見取り図置いとくから。じゃあまた後で。」

何故かホームーレは竹刀をルクルスに渡してその場を立ち去った。

「死なない程度って・・・ま、仕方ない、行くか。早くしないと終電に間に合わないし。」

ルクルスはそう呟いて医務室を出た。

医務室を出ると風景は一変した。そこはまるで秘密結社の基地みたいに未来的であつた。

「うわっ、意外と広いなあ。」

そんなこんなでその訓練場にルクルスは向かった。

それと同時に、ラドイルシティ。駅前にあるカフェテリアでフィナルが休憩していた。

「遅いなあルツ君、帰りにこのカフェテリアでって言ったのに。」

フィナルはルクルスを待っているが当の本人はまだ首都にいる。だが、そんな事をフィナルが知っている訳も無く・・・。

「うう、すっぱかされたのかなあ。グスッ、ルツ君・・・。」

フィナルはもう泣きそうになっていた。すると、後ろのほうから、

「お前、泣いてるんだったらハンカチ貸すけど？」

フィナルが振り向くとそこにはチャライ格好をしたガバイト、そう、あの時ルクルスに道案内をしたガバイトであつた。

「ふえ？あ、ありがとう。」

「ん、別にいいって。それよりお前、どうして泣いてたんだ？」

「え？・・・ちよつとね。けどありがとう、何かスッキリしたよ。じゃ私はもう行くから。はい、ハンカチ。」

そう言つてハンカチを渡した後にフィナルはレジで会計を済ませ、帰つていった。

「フィナル」ティナータか。コイツもルクルスと同じ・・・なのか。

そう呟いて、ガバイトはカフェテリアを出て夜の闇へと消え去った。

第4話 黒き雷の血

ラグーア騎士団本部、地下5階訓練場。この訓練場では騎士団に入りたての新人から凄腕の強者までがここで訓練や調練を行う。

「やっと来たか、ルクルスⅡヴァロン。」

「何がやっと来たか、だよ。もう24時過ぎちゃったじゃないか！」

「どちらにしろ終電はとつくに出発している。それよりも、騎士の基本訓練＋試験を始めるぞ。」

「ちよいちよいちよい！今回はかりは言うけどさ、何で俺が騎士団ソナナになんかに入らなきゃいけないんだよ！」

勝手に話を進めるルカリオにさすがにルクルスは軽く怒鳴った。

「お前には才能があると王女に言われたのでな。だとしたらほかの国に盗られる前につて事でお前を此処に連れてきたのだ。勿論、国王は承認済だ。」

「んな事言われたつて・・・てか俺、まだ14歳なんだけど。確か兵になつてもいい年齢つて18歳以上だった気がするんだけど？」

「騎士団所属が認められるのは13歳以上だから別にOKだ。もう質問は無いだろ、では始めるぞ。」

「つて、結局一方的だし！」

そんなこんなで訓練？とかが始まった。

そのやりとりから約6時間後、場所は変わつてラドルシティ5番街8丁目49番地にあるアパート、「シャンメルデイ」の205号室前。学校の制服らしき群青色のブレザーとスカートを身に着けたフィナルが、インターホンを一定感覚で押していた。

「おい、ルツ君！起きてえ・・・出て来ないかあ、仕方ない。」

すると、フィナルは異様な手つきで。橋名人みたいにインターホン

に連打をし始めた。そして、ファイナルが連打を始めてから数秒も経たない内にインターホンは奇怪な音をたてて砕け散った。

「あ、やり過ぎたか。ま、来ないなら一人で行くしかうう！・・・。」

「

そう言い終える前にファイナルはボタン！とその場に倒れこんだ。

「おっと、悪いな。だがこれなら運ぶことができるし・・・。まあ、あれだな。」

そこにはやつぱりあのガバイトがいた。だが前のようなチャライ格好ではなく、まるで女学生のような格好だった。そしてそのガバイトはファイナルを担ぎ、人目を気にしつつどこかへ去って行った。

ほぼ同時刻、再び訓練場。とつくにルクルスは倒れている。ルカリオは呆れた様子で、

「っおい、立て！おい立て！・・・はあ。仕方ない、ホムーレのとこへでも連れてくかな。」

ルカリオがルクルスを担いで連れてこうとすると扉がギイと開いて誰かが入ってきた。

「ん、今日も相変わらずハードな調練を？いい加減やめたらどうです、カルラド」エクシエクス。」

赤をベースとしていて、クリーム色の毛の集りが所々にあり、顔は鳥で身体は人の様なポケモン。バシャーモである。そのバシャーモは蒼い生地の法衣を着ていた。

「そんな事お前には関係無いだろ、筆頭軍師のシャード」ジョアン殿。」

「幼馴染に対して関係無いとは酷いのでは？騎士団長のカルラド」デイクセン殿。」

カルラドがかかるく嫌味に言っと、シャードと呼ばれたバシャーモも同じように言い返した。

「それよりも何でその様な子どもを連れて来たのですか？この騎士

団に入るといふ事は軍隊に入ると何ら変わりはないのですよ！死と向かい合わせな此処に入れるべきではありません「待て。」

シャードが言い終える前にカルラドは口を挟んだ。

「そもそも、国の法律では騎士団に入る事が許されるのは13歳からだ。それにコイツと歳が近い奴は此処に大勢いる、お前が口出しする事ではない。」

「だからと言って流石に危険過ぎるのでは・・・」

「いや、コイツは死にはしない。何たってコイツは黒雷玉^{アレ}に封じられているモノの血を継いでいるのだからな。」

「こ、この少年が！？世界が一度滅びかけた程の力をもつ二竜の内の一体、黒雷の竜神。その血を受け継ぎし者の放つ電撃は蒼きものとなるその血をこの子が、このレントラーが・・・（ニヤツ）」

「ああ、そういう事だが・・・ま、とりあえずコイツを医務室に連れて行くから。ほら、其処退け。」

カルラドは多少シャードの微かな笑みに違和感を感じていたが、特に気にせず訓練場を後にした。

「後は白焰の神竜の後継者のみ・・・か。どのみちカルラドは邪魔になるな・・・」

そう呟いて、シャードも訓練場を後にした。

第4話 黒き雷の血（後書き）

ル「あれ？何か段落が・・・。」

作「よくぞ気づいた。実は、自分が読んでみたら読みにくかったの
で色んな此処の

ユーザー様方を見て、ちょっと真似してみたのです。ど、ど
う？」

ル「ま、いいんじゃない？（まだ短いけど）それよりも・・・何か
気配を感じる。」

作「気のせいでしょ。」

第5話 思い出すことのできない過去（前書き）

カルラド「うゝむ、どうしたらいいのだろうか……。」

作「どしたの、カルラドさん。」

カ「いや、実はある国から……いや、言うのは止めておこう。」

作「淒く気になるんだけど。」

シャード「カルラド、その事なら大丈夫ですよ。」

カ「どういうことだ？」

シャ「私が率いる暗殺部隊は優秀な者ばかりですよ。この意味、お分かりいただけますよね？フフフ……。」

作「何か止めた方がいい気がするんだけど。」

カ「……だな。」

第5話 思い出すことのできない過去

ルクルスは疲労しきって気絶した後、夢のようなものをみていた。そこは学校の屋上のような場所であった。

（此处は・・・学校？あれ、何か腕に生暖かい感じがする。これは・・・・・・血だ。誰のだろうか？ていうか何で俺は血なんか、あれ？俺・・・何で学校の制服着てんだろう。それにルクシオだし。どうして？・・・あれは誰だ？俺の直ぐ前に倒れているのは。イーブイ？雌のイーブイだ・・・え？血が、大量の血。何だろう、このイーブイには見覚えが・・・！？嘘だろ、おい、まさかコイツは！？）
「フィナル！」

ルクルスがガバツと起きたところは、勿論？医務室だった。急にルクルスが飛び起きて大声を出したのでホームーレと部下らしきラツキー達は目をパチクリさせて驚いている。

「あ、起きたのね。良かったわあ、カルラド君ったら自分と同じ境遇の子には特に厳しくするから心配してたのよ。ま、それで死んだ子はいなかったけど。」

「え？それってつまり・・・。」

「そう、カルラド君の両親も命刻みの橋で行方不明になっているの。」

「ルクルスはカルラドが自分と同じ境遇にある事に対して深い親近感を覚えた。命刻みの橋。それはルクルスにとつての思い出の場所であり、親を失った場所である。」

11年前、ルクルスは両親と一緒に故郷のジクノシティからラドイルシティに引っ越すために向かっていた。しかし、後数？でラドイルシティというところで両親は消息を絶ってしまった。そこは命刻みの橋という怪しげな噂がある不気味な橋だった。そんな事を知

らなかったルクルスの両親は足を踏み入れてしまい、二度と戻って来る事は無かった。

其処でルクルスはずっと帰る事のない二人の帰りをずっと待っていた。だが、だれも其処には来ない。

だが、其処にある一人のリーフィアが訪れた。そのリーフィアはその場を動こうとしないルクルスを自分の家に招きいれ、ルクルスを育てた。数年後、ルクルスはそのリーフィアにお礼を言って家を出たのである。

ルクルスはその事を思い出しつつ再び訓練場へと向かった。

そして、訓練場。ルクルスとカルラドは訓練を再開していた。だが、ルクルスの眼は何か違ったように見えた。

二人が訓練をしていると急に訓練場の扉がバンツ！と開き、誰かが入ってきた。それは、あのガバイトであった。

「よう、元気にしてつか？カルラド。」

「なっ、お前は！？」

「ガ、ガルフィナ女王！？何故Jこのコスプレなどしているのですか！？」

「あのなあ。ま、それよりもルクルス。お前の大切な人を連れてきたから。感謝しろよお。」

そう言うとガルフィナは床に気絶したフィナルを適当に落とした。

「フィナル！てめえ何しやがる！」

「ルクルス！落ち着け。」

今にもガルフィナに飛び掛りそうなルクルスをカルラドは押さえ込んだ。

「だけど、コイツは！」

「コイツでは無い！このお方こそラグーア王国の王女、ガルフィナ
Ⅱラグーア様であるぞ！」

「な！？」

「へっ、という訳だ。ヨロシクな、ルクルス。」

ガルフィナはそう言ってニコツと笑った。

第5話 思い出すことのできない過去（後書き）

ル「あれ？」

作「あ、スペースは場所とかが違うときにしようと思って。」

ル「あつそ。」

第6話 鼬と獅子の1（前書き）

作「しかしシャードさんもやる事が凄いな。」
カ「ま、それだけならいいがな。」
作「？」

第6話 鼬と獅子とその1

ルクルスは急な出来事に少々理解が遅れた。

「え」と、まとめるとつまり、俺とフィナルが首都行きの列車の乗っている時に偶然王女様が乗っていて、とりあえずカルラドさんに俺を捕まえさせ、自らフィナルを襲い、ここに連れてきたと。」

「ああ、そうだ。後それから、カルラド。」

「なんでしょうか、ガルフィナ王女。」

「どこでその名を知ったのかは知らんが俺の本名はガルスト＝ラグーアだからな。よく覚えておけ！」

「へ！？あ、失礼しました。以後、気をつけます。」

ガルストは軽く舌打ちをしたが、そのまま話を続けた。

「ああ、ちなみに何でお前らかつていうのは教えないからな。そこんとこヨロ。」

「ちょ、何でさ！？俺はともかくせめてフィナルだけは・・・」

まだ何か言いたそうなルクルスの口を爪で押さえ、ガルストはこう続けた。

「今は無理だ。親父に止められてる。それにお前だけじゃない、お前等が必要なんだ。ま、早く見習いを卒業しないと元も子もないケドな。」

「だからって！・・・そんな。」

「悪いな。でもこれだけは仕方が無いんだ。この国の為には。それと、その女を早くホームーレのところに連れてってやりなよ。じゃあな。」

そう言つてガルストは訓練場を出て行つた。その後、ルクルスもフィナルをおぶつて急いで医務室へ行つた。

騎士団本部地下6階、資料室。国の歴史書や兵法書などが沢山しまつてあるこの部屋は、埃まみれで殆ど誰も来ない。が、そこで何者かが資料を読み漁っていた。

「え〜と、なにに獣暦238年水無月の三日^{さんのひ}。ラグーアより北に約1500?の場所に位置するヴィキティシム王国で海の神ルギアを信仰する信者達による反乱が起きる。指揮をしていたのは教祖のダイケンキ、名はルドルク・ウエスカティン。信者の数はおよそ十万匹で、当時ヴィキティシムの兵の数はたったの1万匹であつた。だが、ある一匹のエルレイドによつて反乱軍は壊滅、教祖は逃げ出した・・・か。結構興味深いな、一匹で十万の敵をかあ。」

そのポケモンは白い体毛で右耳からつうーと伸びて右目まで赤い体毛になっている。その体はまるで鼬のようだ。その名をザングースという。そのザングースは赤と黒をベースにした法衣のようなものを着ていた。

「グース、また此処に居たのですか。」

「あつ、シャード先生！」

シャードにグースと呼ばれたザングースの少年はシャードの方に振り向いて軽くお辞儀をした。

「ところで、先生は何か調べものですか？」

「ええ、二竜の事について少し知りたいことがありますね。」

「二竜？ああ、黒き雷の竜神と白き焰の神竜の事ですネ。けれど、どうしてですか？あんなの言い伝えに過ぎないのに。」

「まあ、そうなのですが・・・。ところでグース。氷鎧の魔竜というのを知っていますか？」

「何ですか？ソレ。俺は知りませんが。」

「ならいいのです。では、君が一日でも早く一人前の軍師になる事を祈っていますよ。」

そう言つて、シャードは資料室の奥へ入っていった。

「さて、俺もたまには調練場にも行こうかな。」
そう言つてグースは資料室を後にした。

それとほぼ同時刻、医療室576号室。ベッドでフィナルが寝ており、その隣でルクルスが椅子に座つて眠たそうに目を擦っている。すると、コンコンとドアをノックし、ホームレが入ってきた。

「お疲れ様、ルクルス君。」

「あ、ファジユさん。いつもすいません。」

「別にいいのよ、最近は何故か負傷者があまりでてないから。それより、この子も大変だったわねえ。王女様に無理矢理連れてこられたんでしょ？」

「あ、はい。けど、アイツはなんなんですか？」

「まあ、誰でも最初はそう思うわよ。王女様が男装までしてそこら辺ぶらついてるなんて普通はありえない事だからね。けど許してあげてね、あの子に悪気は無いし。」

「は、はあ。あ、もうそろそろ訓練場に戻るんで後は宜しくお願いします。」

「ええ、わかったわ。けどいいの？此処に居なくて。」

「いいんです。今はそれよりも早く脱見習いして事の真相をつきとめたいんです。」

「そう。じゃあ早く行つてらっしゃい。」

「あ、はい。」

そう言つてルクルスは医務室を後にし、訓練場に向かった。

ルクルスは訓練場に向かう途中に色々と考えた。自分の事、それからあの夢の事。

（あれはどういう事だったんだろう？何故昔の俺とフィナルが・・・。）

そうこう考えている内に訓練場の前に着いた。ルクルスが入ろうとすると、

「あれ？君は・・・。」

横からグースに声をかけられた。一瞬、沈黙がその場を包んだ。

第6話 鮎と獅子とその1（後書き）

グース「作者殿。」

作「ん、何？」

グ「これから宜しくお願いいたします。」

作「いいよ、そこまで固くならなくても。」

グ「ですけど。」

作「ホントにいいって。第一俺の方が「待てえい！」どうした！？」

ル「いや、あんた今自分の個人情報ばらそうとしてたぞ！？」

作「別によくね？」

グ「よくないです。」

第7話 鼬と獅子とその2（前書き）

作「課題終わらねえよ」（焦）

シャ「作者殿！王女とカルラドを見ませんでしたか！？」

作「見てないよ。それよりシャード、課題終わらすの手伝ってえ！」

シャ「あなたが悪いのですよ。それよりどうしましょう。」

作「ん、待てよ。あいつ等からメモを預かってるんだった。」

シャ「それ、早く！」

作「はいはい。え〜と・・・シャードへ。俺、ちょっと外国行ってくる。カルラドも一緒だから安心しろよ。ガルスト・・・だつてさ。」

シャ「ちょ・・・え！！！」

作「さて、課題やる。」

シャ「え！？ちよつと待って下s」

第7話 鼬と獅子とその2

一瞬の沈黙。だが、その沈黙は一瞬にして消えた。

「?・・・!グースじゃないか!」

「ル、ルクルス!」

二人は何回か確認した後握手して笑いあった。

「何でお前が此処に?確かラドイルに引越すって・・・。」

「ま、色々あつてな。それよりお前こそ何で?」

「ん?それは・・・」グース、此処に居たのですか。」

グースが話そうとした時、後ろからシャードがやってきた。

「あ、シャード先生。」

「誰だ?あんた。」

ルクルスがそう言うのとグースはちよつと引いた。

「な、何言ってるんだ!この方はラグーア国筆頭軍師のシャード」
「ジョアン様だぞ!」

「なつ、筆頭軍師様とは知らず、ご無礼をはたらいた事をどうかお許し下さい!」

ルクルスは焦つてその場で平伏した。が、シャードは笑顔で、

「大丈夫ですよ。そんな土下座なんかしなくても。」

と言った。

「し、しかし・・・。」

「だからいいですよ。グースも普通に話していますし。」

「っ、僕は騎士見習いですが軍師見習いでもあるからそう話せるのです。」

「・・・まあそのような感じですので私はこのように話させていただきます。」

「そうですね、ならいいのです。」

ルクルスに軽く呆れるシャードであった。

それとほぼ同時刻、首都国際ホール。ラグーア王国最大級の広さを誇るホール。主に人気アーティストなどがLiveを行う。

ホールの外一（裏口）でカルラドは誰かを待っていた。

「あいつめ・・・此処で待っててね」とか言っておきながらも2時間も経ってではないか！」

どうやら長時間待っていたようでカルラドはかなり不機嫌そうに見える。

それから数分後。カルラドはもう帰ろうとしていた。が、向こうの方から誰かがこちれへとダッシュで来た。

「御免！遅れちゃった！実は道が混んでいべつっ」

「遅いわ！」

カルラドは走ってきた者に思い切り膝蹴りをくらわせた。その者は人間のような風貌で水色の髪、胸の間に赤い突起のようなものがついている。ほうようポケモン、サーナイト（色違い）。そのサーナイトは右目を髪で隠しており、黒い質素なドレスを着ていた。

「ふう、女の子に暴力振るうと結婚出来ないよぉだあ。」

「ふっ、何が女の子だ。お前も俺と同じ29歳、思い切りアラサーのオバサンだぞ。」

「お、オバサンとは失礼ね！カルっちだって一生独身で孤独死しちやえばいいんだ！」

「はあ・・・。それよりも決心はついたのか？人気ミュージシャン、ラフス・ユークツ。」

「あ、いや、その・・・。」

カルラドにラフスと呼ばれたサーナイトは戸惑いを隠せていない。そして少し考えた後、

「と、とりあえずどこかで休憩しよ、ほら早く！」

「あ、おい！」

と言ってラフスは強引にカルラドを連れ去った。

二人が着いた所は、王国内で唯一ティラミスが食べられる喫茶店、
「ブルノアゼバイの高原」。

「ほら、早く！」

（また俺の奢りだろうな）

カルラドはそう思いつつ渋々中に入っていた。

そして二人が中に入った途端、

「いらつしゃいませ！！」

と、大きな声で出迎えられた。店員は皆雌で、ウェイトレスの格好をしたイーブイの進化系だった。ちなみにさつき挨拶をしたのは、ブラッキー、エーフィ、サンダース、シャワーズ、グレイシア、リ
ーフィア、そしてブースターもふもふさんの店員である。

「此処、どこぞのマニアには堪らないだろうな・・・。（苦笑）」
カルラドは恐ろしい程に苦笑いしていたが、ラフスはそんな事は気にせず店内の一番奥にある席に座った。カルラドも少し経ってから座った。

「で、どうする？」

「ちよ、まずは注文が先。すみませ〜ん。」

ラフスが言つとすぐ店員がやってきた。氷のような色をした体毛をもつイーブイの進化系、グレイシアだった。

「はい、ご注文は何でしょうか？」

「え〜と、もふもふうホットコーヒーと月光ティラミスを二つずつで。」

「かしこまりました！少々お待ち下さい。」

で、店員が去っていった。すると、カルラドは急に立って、

「・・・悪いが基地に戻る。お前は早く街の外へ行け。わかったな
！」

そういつてカルラドは店を出ていった。

「ふえ！？ちよ、ちよっと！」

ラフスがカルラドを追いかけて外に出た瞬間、バァーン！！！！と爆発がおきた。ちょうど、タワーの辺りで・・・。

その爆発より少し前、タワー最上階、大展望台。

「へえ、基地つてこのタワーの地下だったのかあ。」

ルクルスはちよつとハイテンションである。何故かは知らないが。

「ほお、二人は幼馴染だったのですか。」

「はい、たしか最後に会ったのが四歳になる直前のときで。アイツの両親が科学者で、研究の為に此処を離れる事になって。俺の両親もアイツの両親とは仲が良くっていつもみんなで食事とかもしていたんです。だから俺は今日アイツに会った時、帰って来たのかと思つてたのですけど。まさかお二人共行方不明になっているとは・・・。」

「そうだったのですか・・・。」

シャードとグースは二人でベンチに座つて話している。

「うあ、ラドイルまで見えるとか。www」

ルクルスは双眼鏡的な奴で何か見ている。

「ん、筆頭軍師様。あれは何でしょうか？」

「どうしたのですか？」

「いや、何か黒くて巨大なものが・・・こちらに向かつてきています！！！」

シャードはその方向を見た。確かに黒くて巨大な何かがこっちに向かってきているのが見えた。

「あ、あれは！？」

段々と近づいてくる何かにシャードはそれが何か分かった。それは、鳥のようなポケモン、ヤミカラス。

約五万の軍勢だった。ヤミカラス達が着ている鎧の胸には剣で表したVのマークがあった。

「ヴォトクシア帝国が攻めてきた・・・だと。」

「な!?!」

「え!?!」

シャードの発言に二人は驚愕した。ヴォトクシア帝国。ラグーア王国の国宝、黒雷玉を狙う大帝国。

「何故この時期に・・・?それより二人とも早く此处から逃げな!?!」
「バアーン!?!」と急に爆発がおきた。どうやらヤミカラスだけではないようだ。

「くっ、まさか他にも敵が!?!」

「ああ、ご名答!」

「!?!」

三人がサツと後ろに振り返るとそこには、深緑色の髪で頭に突起、人型で、腕が刃状のポケモン。エルレイド。そのエルレイドは黒い鎧とかを着ており、首には赤い布を巻き、巨大な戟を片手で持っていた。

「何者です!?!」

シャードが問うとそのエルレイドは鼻で笑い、こう言った。

「フッ、俺はヴォトクシア帝国七武将の一人。ギディアークライズだ!?!」

第8話 襲撃、そして逃走。

ラグーアタワー最上階。シャードは二人を庇いつつ後ずさりをする。

（帝国七将、噂には聞いていましたが・・・？この男、確かグライズって・・・！！）

シャードは何か気づくと二人を後ろに突き飛ばし怒鳴った。

「二人共早く逃げる！これは命令だ、分かったな！！」

「は、はい！」

二人はシャードの急な変わり様に少し驚いたが、直ぐにタワーの階段に走っていった。

「待ちやがれ！！」

「おっと、てめえの相手はこつちだぜ？」

ギディアが二人を追いかけてようとしたが、シャードがギディアの前に立ち塞がった。

「くっ、あまり無駄な殺生は避ける、と言われていたんだが仕方ない、死ねえ！！」

ギディアはシャードに向かって戟を力任せに振り下ろす。だが、シャードはそれを持っていた扇で見事に跳ね返した。ギディアは一瞬何が起こったか分からなかった。シャードはその様子を見てニヤリと笑ってこう言った。

「なめてもらっちゃ困るねえ。この扇はエアームドの古羽七枚をキリキザンの腕の刃で研磨し、さらにそれをウインディの火炎で熱した後、ハガネルの尾で叩き、そこにクルミルとキャタピーの糸を編んだものと上質のオレンの木の皮を合わせ、柄にして取り付けただものだ。そこら辺の扇とは違うんだよ。」

シャードが自分の扇の事に対して熱弁している間にギディアは態勢を立て直し、武器を構えてシャードに振り下ろそうとしていたが、シャードは目を瞑ってまだ扇の説明をしていたが、急にギディアの

方を向いて目を見開いてこう言った。

「勝負はとづくに着いているというのに、愚かなお方だ。ギディア
「グライズ。いや、ユクーツさんとお呼びした方が宜しかったかな
？」」

ギディアは驚きながらも恐怖し、後退りをしていた。

何故なら、そんな言葉よりも敵の目が、その存在が恐ろしかった
からだ。

シャードの眼は赤く染まり、魑という文字が目の中に描かれてい
るように見えた。

そして次の瞬間、ギディアの首は胴から離れ、床に転がった。

ルクルス達は必死に階段を下りていつていた。全698階のタワ
ーの階段を。

「はあ、はあ、ヤバイ、もう限界。ちょ・・・と休ほふへ（休もう
ぜ）？」

「何馬鹿な事言っただ！敵が其処まで迫って来てるんだぞ！？」
だが、ルクルスはもうばてているようだ。

「そ、そふなこふおいふあれふえほ（そんな事言われても）・・・」

「

「・・・はあ。仕方ない、3分間だけだよ。」

「ひよ、ひよっふあ（よっしゃ）・・・」

そう言っただけでルクルスはその場に倒れこんだ。（階層部分なので倒れ
られます。）

グースは考えていた。

（何故帝国はこの時期に攻めてきたんだ？今、月は師走。兵糧は貯
めておくため今攻めれば兵糧不足は確実なはず。それなのに何故だ

「？今攻めても利益は無いはず……！！！」

「そうか……！」

「ふえ！？ぐえ！」

グースが急に大声を出したせいでルクルスはビックリして顔を床に思い切りぶつけた。

「……大丈夫か？」

「お前のせいだ、ボケェ……！」

「それよりもだ。分かったぞ！帝国がこの時期に攻めてきた理由が……！」

「え？」

「それはだなあ、「ラグーア騎士二名！発見しました……！」

グースが自慢げに話そうとした瞬間、帝国軍の兵が二人を見つけ、
ヤミカラス
大声をだした。

「し、しまった……！」

「お前のせいだろ……たぶん。」

「逃げるぞ、早くしろ！ルクルス！」

「ん！？ああ。」

二人は急いで階段を駆け下りる。だが、急に天井が崩れ落ちた。

「な、何だ……？」

「見いつけたあ、もう逃げられないよお。アハハッ」

崩れた天井から何者かが下りて来た。

茶色い体毛、足の方まである長い耳、所々にあるクリーム色のフワフワした毛、兎のようだが人のよう。

うさぎポケモン、ミニロップ。

そのミニロップは黒い鎧で、薙刀を持っていた。

「貴様、何者だ！」

「ん？ボクはミュート。ヴォトクシア帝国七武将の一人、ミュート
II
エクイレンスだよお。ボクっていつてるけど女の子だからねえ。

エヘヘ」

ミュートというミニロップはグースの問いに答え、ニコつと笑顔を

見せた。

「七武将の一人・・・お前、あのギディアとかいう エルレイドと同じ地位という事か!？」

「あれれ？ボクってそんなに弱く見えたあ？あんな雑魚と同じにしないでお。」

「なつ、アイツでまだ雑魚だと・・・。」

ミュートの言葉により危険を感じたグースが腰に携帯していた短刀に手を掛けようとした。だが、それに気づいたミュートがグースの眼前まで来て、素手でその短刀を弾く。その短刀はグースの左足に刺さった。

「そんな物騒なものなんて出さないでよねえ。ボクは戦いに来たんじゃ無いし。それに、用があるのだって君じゃなくてその後ろでこそこそと何かやってる子猫ちゃんにだからさあ。」

「なつ、逃げる、ルクルス!!」

「ふえ!？」

ミュートの狙いがルクルスだと知ったグースはルクルスに逃げるように指示したが、ルクルスはミュートの言ったとおり、何かを組立てていて動けそうにない。

「あれえ、君はあの子の秘密を知っているんだあ。あの子が英雄の力、いや、この世界を消滅できる程の力をもってる事を。」

「それを知ってルクルスを・・・。」

「くふふ そうだよお。と、いう訳であの子はボクが頂いていくからねえ。」

ミュートがルクルスの方に歩き出した。グースは動こうとしても左足に刺さっている短刀が足を貫通して床にまで到達しており、動かない。

「ほらあ、君を向かえに来たよお。ボクと一緒に行こうよお。ね?」
「・・・・・・・・。」

ミュートはルクルスの腕を引っ張り連れて行こうとするが、ルクルスは動かない。

そろそろ限界のミュートは無理にでもルクルスを連れて行こうとするが、まだルクルスは動かない。

「ねえ、ちよつとお……もう……仕方ないなあ、君を殺してでも連れてくよお。」

ミュートが薙刀をルクルスに突き刺そうとしたその時！

「まだ死にたく無いし。だからテメエが俺のかわりに死ね！」

ルクルスはそう怒鳴り、ミュートの腕に長い針金の様なものを突き刺した。どうやらさつき作っていたのはこれのようだ。

「あはは！何コレ？こんなのでボクを殺そうとしたの！？こんなのじゃ・・・あれ？ぬ、抜けない！？」

ミュートは腕に刺さった針金を抜こうとしたが、どうやっても全く抜けない。

「残念だったなあ、ソイツの先をちよつと工夫してな。抜けないようにしてあるんだ!」

ルクルスはかなり自慢げに言った。

「それに、そいつでお前を殺そうなんて思っていない。分かるだろう？金属は電気を直に受ける！」

「!?ま、まさか、これは……。」

「じゃあな、先に地獄で待つてな！はああ！！」

ルクルスはミュートの腕に刺さった針金を掴み、一気に電流を流し込んだ。だが黄色ではなく、蒼かった。

「ぬわあ あああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

ミュートは叫び声を上げながら床に倒れこんだ。

「痛いだろう。だって血管に直接電流を流し込んだのだからな。でも安心しろ。その内電流が心臓に達して、死ぬ。」

ルクルスはそう言い、グースの許へ歩いていき、グースの左足に刺さった短刀を抜いた。

「グース、立てるか？」

「いや、無理っぽい。」

「そうか・・・あ、そういえばさっきお前が言ってたさ、帝国が攻めてきた理由って何だ？」

「え？ああ。それはな「二人とも大丈夫か!!」」

「またもやグースの話は何者かによって遮られた。」

「またかよ・・・。」

「あれ、騎士団長？」

二人がその方向を向くと、そこには全身傷だらけのカルラドが立っていた。

「お前ら、怪我は無いか!？」

「グースが足に怪我を負いました。ってそれよりもカルラドさんの方が傷だらけじゃないですか!」

「いや、俺はどうってことはない。とりあえず、グースの治療が先だ。」

そう言ってカルラドはグースの足に消毒液を掛け、包帯を巻いた。

「有難うございます。」

グースが礼を言うと、カルラドは軽く頷いた。

「ん？あそこに倒れているのは・・・。」

「あれですか。実は、俺が倒したんです!」

「ほう、お前がかあ。」

カルラドはルクルスを褒めつつ眼を閉じ、気を集中させた。

「!!」

「どうしました？」

「おい、本当に倒したんだよな・・・。」

「え？ええ。」

カルラドはルクルスに確認しつつ、構えた。ルクルスもそれに答え、グースを庇うように立ち上がった。

「こいつ・・・まだ死んでない!!」

「な!？」

「アハハハ ばれちゃったあ？上手く死んだフリしてたんだけどなあ。波導でも使ったの？」

ミュートはなんでも無かったようにスクツと立ち上がった。

「ほう、中々やり手のようだな。」

「褒めてくれてるのお？ きゃは 嬉しいなあ！ ご褒美に・・・楽に殺してあ・げ・る・ネ♪」

双方とも異様な殺気を放っている様子をルクルスは少し怯えつつも興味心身であった。

第8話 襲撃、そして逃走。（後書き）

作「ああ、久しぶりの投稿だあ。」

ル「うえゝい。」

作「どした？」

ル「いや・・・何でも。」

作「？」

第9話 退散・・・？

その頃、国王一家が住む城では、皆パニックしていた。国王ノグ
「ラグーアを除いて。」

「国王様、早くお逃げ下さい！！」

「何を言っておるか！我は此処に残るぞ！！」

召使らしきエーフィが国王に早く逃げるように説得しているが、国王はそれに応じない。

「国王様。」

大臣が出て行き、それから直ぐドアの外で声がした。

「うむ。で、どうじゃった？」

「はい。斥候の知らせによれば敵の数はおよそ十二万。その内六万は新タワーに、残った六万の内二万はホエルオー・ウォールの周り、狩人の森に入っていたとの事です。」

「ふ、狩人の森に入ったのならもう六万は倒したといってもよいな。で、残りの四万はどうした？」

「全員、吊るし首にされておりました。」

「・・・また、シャードの仕業か。」

「はい。さらに今回はタワーの方でも七将と思われる者の首も。樽の中に入っており、酒に浸してありました。」

「相変わらずじゃのお。あやつも。」

「では、私はこの辺で。」

「ん、もう行くのかね？娘さんもあのタワーの地下におるのに。」

「はい。あの子には悪いですが、私も暇じゃ無いので。」

「うむ。また、頼むぞ。」

スツと人の気配が消えた。国王はそれを確認すると軽く笑った。

「アラシム」ティナータよ、もう少し自分の娘を大事にせんと我の馬鹿娘みたいになってしまふぞ・・・。」

国王はそう呟くと、溜息をついたのであった。

ラグーア新タワー394階、ちょうど其処ではカルラドと帝国七将の一人であるミュートが未だに其処に立ったまま動かないでいた。
「・・・ルクルス。」

不意にカルラドが言った。

「は、はい。」

「グースを連れて逃げる。」

「いや、しかし！」

「いいから逃げるんだ！俺は大丈夫だ。勿論シャードも。だから早く逃げる！！」

カルラドの言葉に頷き、ルクルスはグースをおぶって階段に走った。
「ん、やはりこっちの方がいいな。」

カルラドは懷から中央が青く光るピンポン玉ぐらいの球体を取り出し、ルクルスに向かって投げつけた。

「へ！？」

球体がルクルスに当たるとその場に煙が舞い、ルクルス達を覆い隠す。そして、その煙が消えた時、ルクルス達はその場にはもう居なかった。

「ほう、逃がしたのか。相変わらずアイツの子孫に甘い奴じゃのお。御主は。」

「自分のキャラ封印してまでキャピキャピした言葉で話し、そうする事で自分に対してより恐怖する敵を見て快感しつつ敵を殺すなんて事やってるド変態兎には言われたくないな。」

カルラドはミュートを睨む。だがミュートは軽く笑った。

「まあよい。あの小僧を連れ去るのも目的であったが、御主を連れて帰るとも言われておってなあ。」

「俺は帰らないしルクルスも渡さん！」

「ふむ。そこまで言うのであれば仕方が無い、我も退散しようかの。そろそろオレンパックをしなければならん時間じゃし。」

ミュートは外を見てそう言う。

「如何いう風の吹き回しだ？お前がそんな事で退散するなんて。」

「我ももう若くは無いのじゃ。無駄な争いで傷がつけば治りが遅いし跡がつく。それに今回の目的はあくまでも様子見。いや、齒向かった者への処罰の為。このタワーを襲ったのもその為じゃ。」

「そりやそうだろうな。俺と違ってお前は小野妹子が隋に行くより前から生きているのだからな。ん、処罰？そりやどいう事だ。」

「まあ見ておればもうじき分かる。それじゃあ我は帰るんでな。次会うときはもう話せんじやろうが。その時はこのような事はせん、おそれく帝王様は本気でこの国を潰しにかかるであろうからな。」

ミュートはそう言うと言つとフツと消えた。カルラドが外を見るとヤミカラス達が退散していくのが見えた。

それを見てカルラドは肩を降ろし、溜息をついた。

誰かが自分に近づいて来ている事さえも分からなかった。

第9話 退散・・・？（後書き）

ル「今回、手抜きだろ。」

作「違います。」

ル「じゃあ一回書いたの消したのは？」

作「・・・・・・・・次回もお楽しみに!!」

ル「確信犯。」

第10話 戦の後の休息の（前書き）

作「久々&2011年最初の投稿です」

ル「皆様、あけましておめでとございます」（命刻々メンバー同）

作「随分遅めの挨拶」

ル「てめえが原因」

作「すみません」

第10話 戦の後の休息の

（ここは何処だろうか 暗い 冷たい 前にもこんなものを見た気がする 声が聞こえる 悲鳴 叫び 音がする 業火 雷 光が見える。紅い 蒼い 白い 黒い 誰かが呼んでる 綺麗で、それに暖かくてそれに何だか………）

「□・・・ン！」

「・メパ・！」

「ロメパン!!」

「誰がロメパンじゃああ!!!!!!!!」

ルクルスはガバツと起き上がる。其処は見慣れない豪華な部屋の豪華なベッドの上。

「あれ、此処は・・・？」

「俺の部屋だ」

ルクルスが声のした方向を向くとそこにはガルストがいた。今回はドレスを着ている。

「ガ、ガルスト！？何で？だって俺はそれは我が説明しよう」

ガルストの後ろにある扉が開き、誰かが入ってきた。

黄金色のような鱗、牙と共にある赤と黒の二色の斧らしきもの。

あごオノポケモン、オノノクス。

そのオノノクスは青ジャージを着ていて、灰色のスリッパを履いていた

「んあ、親父か」

「いつも父上、もしくはお父様と呼べと言っておるだろう」

「じゃあ・・・お父様。ご機嫌麗しゅう。今日はどのようなご用件

で？」

「この馬鹿娘が……はあ」

カルラドの態度にそのオノノクスは深い溜息をついた。

「あのう……」

腰を低くしてルクルスが小声で言う。

「ん？ああ、済まぬ。自己紹介がまだじゃったの。我はラグーア王国第八代国王、ノグⅡラグーアと申す。」

「え？こ、国王様！？こ、これは失礼、最低限の敬語で話してくれればよいぞ」

ルクルスが平伏しようとしたのをノグが止める。

「では。何故俺はここに？戦いはどうなったのですか！？フィナルは！」

「まあ待て。一つずつ説明するのな。まず最初。御主が此処にいるのは御主に聞きたい事があるからじゃ。それと、帝国軍はもう撤退しておる、安心したまえ。もう一週間経つ。後、フィナルという女子は三日前に目を覚まし、今は騎士団本部におる。これでよいかな？」

「あ……はい」

「ならよい。では、私の部屋に参れ」

そう言つてノグ達は部屋から出て行った。ルクルスも半信半疑で直ぐについていった。

時を少し巻き戻し、一週間前のラグーア新タワー。

カルラドは疲れきっており、その場に倒れこむように座った。

それに近づく一つの影。いつものカルラドであれば直ぐ気づくのだが、今日は無理であった。

その影は少しずつ、確実にカルラドに迫る。そして、カルラドの真前までやってきた。そして、

「カルラド。そんな所で居眠りなどしていたら殺されますよ?」

その正体はシャードであった。少し頬に傷がついている。カルラドはやつと気づき、ゆつくりと立ち上がる。

「そう簡単に殺されるわけ無いだろ。それより、またアレをやったのか? だとしたらもうやらぬ方がいい」

「それを決めるのは私自身でs」もしこの事が軍にばれたら、殺されるぞ。お前だけじゃなく、騎士団員全員も。勿論、俺も含めて。」

「ですが、そんな事をすれば処罰されるのは軍ですよ? そんな馬鹿な事はしm」お前、疲れて考える能力が駄目になつてるだろ。」

「は? 何を言つてるのです? 私を誰だと思いですか。ラグーア王国筆頭軍師、シャード」ジヨアンですよ? 何があるうと私は大丈夫なのですよ、あの時から」

「見え透いた嘘を吐くなよ。誰にだって脳の寿命がある。どんなに命の方をのばしたとしても、必ず脳の方はそれに追いつけずに機能を停止する。もう引退を考える時では無いのか?」

「ふざけるのもいい加減に……!!」

シャードは口を手でふさいだ。手をはなし、そこ見ると真赤に染まつた血。

「なっ!? そ、そんな。ま、まだ私は……倒れる訳には!!」

シャードはその場に倒れそうになる。それをカルラドは担いで階段の方へ足を進める。

「如何してそこまでして生きようとするのだ。何故そこまでして」カルラドはシャードにそう問うた。

「あのお方は……他の魔獣とは違う私を認めてくださった……だから、私は、あのお方が一番愛していた、この、国を、二ホンを……永久に護ると……決めたのだ」

「もついいんじゃないか?」

「駄目だ! まだ……まだ駄目なのだ……頼む、カルラド……」

帰ったら、いつものアレを・・・？零？を私に・・・」

そう言つてシャードは眼を閉じた。どうやらまだ生命はあるようだ。
「そんなにまで大事なのか。その約束は」

カルラドは階段をゆっくり下りていった。

時を戻して現在。ラグーア王宮、王の間。ルクルスはノグに連れられ、ここに来ていた。

其処は国王が住むとは到底思えない場所であつた。

其処を一言で表すならば、それは六畳の個室。極ありふれた個室だつた。

普通のソファにテーブル。それにパソコンの乗ったデスクとチェア。後、32型の薄型テレビとHDにオーディオ。明らかに一般人並の部屋である。

「此処が我の部屋じゃ」

「・・・」

ルクルスは口をポカンと開けて立ち尽くしている。

「ん？ああ、一国の王がこんな部屋つていうのが、あれ？と思つたんじゃない」

「え！？いや・・・その・・・はい」

ルクルスがそう言うと、ノグは高笑いして

「アッハッハッハ！！まあそうじゃろう。だが、我はこれがよいのじゃ」

それを見て呆れ気味のルクルス。

「さて、そろそろ本題にはいろう」

「はい」

ノグは表情を変え、ソファに座つて話し始めた。

「まずは、御主は何処の出身じゃ？」

「へ？あ、えーと、ヴァンステイの港町です」

「ほう、他国との貿易が盛んなあの街か。では、何故ラドイルに？」

「えと、父が転勤で・・・」

「転勤・・・じゃと!？」

「どうしました？」

「いや・・・何でもない」

ノグは少し取り乱すが、話を質問を続ける。

「ふむ。では・・・カルラドの所でよいかの」

「？」

ルクルスはまさに???の表情。

「ああ、悪かったの。実は御主の小隊分けをしとったんじゃ」

「え？つまり・・・俺を連れてきたのは騎士団で、誰の元で鍛えて、誰と一緒に過ごすか、というのを決めていたのですか？」

「おお、物分りが良くて助かったわい。そう、つまりそういう事じゃ。試してみたみたいで悪かったの」

「いやいや、滅相も無い。ですが、何故国王様がこんな事を？」

「なに、15歳以下の騎士には全員行っておるのじゃ。態度や常識、心とかをな」

「ですが・・・」

「まあよい。早く本部に戻るがいい。他の四人も待っておるだろう」
「四人？」

「御主のチームメイトじゃ」

「そうですか。それでは俺はこれで」

ルクルスは深く礼をし、去っていった。

「さて、どのくらい強くなるのか見ものじゃ」

ノグはテレビのリモコンを手に取り、電源ボタンを押した。

第11話 入団（前書き）

作「ちょっと短めですが、これで第一章は終わりです」

ル「昨日更新したばかりだな・・・・・・・・」

第11話 入団

翌日、騎士団本部地下5階。此処には訓練場や各自小隊の部屋などがある。で、その訓練場。

其処には騎士達が集められ、整列していた。

「では、これより第582回、入団式を始める」

設置された白い台に乗ったのは、ルカリオのような容姿だが小さく、少し丸みをおびた感じのはもんポケモン、リオル。

そのリオルはカルラドに似た着物を着ていた。

「では新入団騎士の者、前へ」

リオルが言つと、一番端に並んでいた者、つまり新入団騎士達が出る。勿論、その中にはルクルスもいる。そしてもう一人、

「うわぁ、堅苦しい。どう思う？ロメパン」

フィナルがいました。（笑）

「だから………もういいや」

ルクルスは諦めたらしく、溜息をつく。

で、全員が台の前に並び終わる。

「全12人である。皆、しっかりと面倒やその他もろもろをするように。では小隊分けを行う、新入団騎士は其処に」

新入団騎士達が移動し終わると、リオルが薄い紙を取り出して名前を呼び始めた。

「まず、ムトナ⇨リムトリア。第二小隊、ホーリーサザンクロス。

隊長はムクホークのフラッフィス⇨ケートニア」

呼ばれたフライゴンがその小隊の裏に並ぶ。

どんどん名前が呼ばれていき、

「ルクルス⇨ヴァロン。第一小隊、ヘルファング。隊長は騎士団長カルラド⇨デイクセン」

ルクルスが呼ばれ、並ぼうとするが、カルラドがいない。

「なお、騎士団長はご都合により、出席できない。代わりに隊長代

理の後ろに並びなさい」

ルクルスがその代理の後ろに並ぶ。その代理とは、

「僕は隊長代理のフィレンツェ・ヴィレア。宜しくな、ルクルス君」
隊長代理のフィレンツェは軽く言った

「あ、はい」

どうやらフィレンツェはフタチマルらしいが、一番の特徴ともいえる二枚のホタチは着ている服で隠れている。

そんなこんなで二人が話していると、

「フィナル」ティナータ。第一小隊、ヘルファング。次のギール」
リファンスも同じだ」

「おっ、フィナルもか」

そうこう言っている間にフィナルともう一人、ギールというグラエナの少女が並んでいた。

そして、最後の一人が呼ばれる。すると、リオルは訓練場の扉の方を見てハツとして深く礼をし、台の上から降りた。

そして新たに台に立ったのは、

「新入団騎士の諸君、遅れて済まぬ。私はこのラグーア騎士団首都本部長及び第一小隊？ヘルファング？の隊長、カルラド」エクシエクスだ」

カルラドであった。少し眠たそうだ。

カルラドはそう言った後、直ぐに台から降りて第一小隊の前に立った。

「チームヘルファングに新たに入った諸君、これから宜しくな」

「「はい！」」

その様子を見たりオルは軽く咳払いをして再び台に上がる。

「では、これで解散とする。その他の細かい規則などは各自新人騎士達に教えるように！」

こうして、ルクルス達はラグーア騎士団に入団した。

ラドイルシティ関所より南西7?地点。

其処は、霧が全てを覆い隠しており、方角も判らない程である。

その中に、青白い光が幾つも浮かんでいる。其に近づくとそれが何なのか判る。

橋。紅い色の、何処までも続いているような大きくて、長い橋。

その橋に青白い光が浮いている。いや、何かの上に付いている。それが囁く。

「わゝい、地界だぁ。やっと来れたね。クスクスクス……」

それは、他の光とも話していた。

その後ろ、橋の向こうから何かが来た。小さいそれより大きく、複数の橙の光を灯し、そのモノは、やって来た。

「わぁ、おつかあだぁ」

「おつかぁ、何処行くの?」「何処?」

小さい光達が聞く。

「それはねえ……………」

「何?」「何々?」「」

「皆で魂を喰らいにいくのよ。皆はどの位たべたい?」

そのモノが光達に聞く。

「沢山!」「沢山沢山!」「」

小さい光達はそう答える。

「あらあら。皆そんなにたべたいの?食いしん坊ねえ」

「ねえおつかあ。早く行こ」

「そうね、行きましょうか」

そう言つて、光とモノは、ゆらり、ゆらり、と霧の中に消えていった。

魂ヲ求メテ。

第11話 入団（後書き）

作「と、言うわけなんで次はルクルスの休息って事で」

ル「それやる意味ある？」

作「ある。とりあえずちょっとした談義と少し第二章の始めらへんを書くから」

ル「喋りつつ、少し進めると」

作「はい」

ル「そうすか」

作「はい。では……あ、シャードさんの、次に載せます。すみません」

ルクルスの休息。第一章終

ラグーア騎士団本部地下5階、第一小隊「ヘルファング」の部屋。基本的に個人の部屋はこの談話室（二十畳の洋室で、妙にゴシック調）から行く。

其処のソファによつかかり、グテンとしている奴がいる。

「だりい、マトマジューズ飲みてえ・・・・・・・・」

それは、ルクルスである。

基本、コリンク種は殆ど甘党なのだが、ルクルスはとてつもなく辛党だったため、小学生の頃にいじめられていた事があった。が、当の本人はよく覚えていないらしい。

ちなみに、マトマジューズとは名前の通り恐ろしい程に辛いとされるマトマの実のジューズである。

「うう・・・・飲みた「黙りんしゃい！！」」

ルクルスを静止させたのはフィレンツェ。ルクルスの先輩だが、歳は同じ14歳である。

「今何時だと思ってる？まだ朝の4時だよ！？そんな朝早くから五月蠅くして・・・・他の人達に迷惑だろ！」

「うう、そんな事言われても飲みたいのだから仕方ないじゃないですかあ」

実際フィレンツェの方が五月蠅いのだが、ルクルスはそんな事を言えない。

「仕方ない・・・・・・・・ほら。木の実生活」

「ありがとうございます、先輩！！」

フィレンツェは談話室にある、巨大な冷蔵庫から缶ジュースを取り出してルクルスに渡した。缶には「灼熱元氣 木の実生活 赤版」と書いてある。それを受け取ったルクルスはフィレンツェにお礼を言い、一気に飲み干した。

「プファァー！！これがいい、これこそが最強だあ。木の実生活はこ

の他に緑版、青版、黄色版とあるけれど、やはり一番は赤版だあ」

「そりゃよかった」

「はい」

幸せそうなルクルスを見てフィレンツェは少しほんわかとした気分になる。

「そういえば、ルクルス君は如何いう経緯で此处に来たの？」

「え？それは・・・」

ルクルスは思い出しながら、話し始めた。

「元々俺が首都に来たのはフィナルとライブを観に来る為だったんです」

「へえ、フィナルちゃんと・・・」

・・・
・・・
・・・

遡る事一ヶ月前。ラドイルシティ3番街56番地、ラドイル北中学校F棟四階にある吹奏学部部室及び第二音楽室。

「え！？ラフスさんのライブチケット!？」

「ん、ああ。欲しい？」

「欲しい欲しい!!」

ルクルスはフィナルに二枚のチケットを見せている。一方フィナルは目を輝かしてそのチケットを見ている。

「ん。じゃあこうしよう。俺の問題に答える事が出来れb」問答無用、力づくで奪う!」

ルクルスの話も聞かず、フィナルはルクルスから強引にチケットを奪う。

「ちょ!.....はあ、いいよ。負けた。仲の良い友達と行って来な」

「ありがとう!じゃあ、明日。朝の六時に駅集合ね」

「へ?」

「ほら、休憩時間終わるよ」

「あ.....ああ」

.....

「てな感じで行く事になったんです」

「へえ、吹奏楽部なんだ」

「其処は食いつくところじゃないですよ」

「いや別に。僕もそうだから」

「え、マジですか!?で、楽器は何を?」

「クラリネット」

「そうなんですかあ」

「ルクルス君は?」

「僕はトロンボーンです。ちなみにフィナルはバスクラリネットです」

「ほお。さて、話の続きをお願いします」

「あ、はい」

[illegible]

そしてその当日。ラドイル駅三番ホーム。

「さて、もう乗るか。ファイナル、行く」

「私は別の車に乗るよ」

「何で？」

「いや……ちよつと知り合いがいるっほいから」

「あ……そ、それなら、し、仕方ないんじゃない？ いいよ
お、俺は」

「そう？それならいいけど。じゃ、また後で」

「ああ、また後で」

そしてフィナルは隣の車両に乗る。それを確認してからルクルスも車両に乗り込む。

「さて、何処に座るに」

ルクルスはガラガラの中を見て悩む。それもそのはず。まだ日曜の午前六時半だ。誰も居る筈が無い。

「よし、決めた。端にしよ」「っ

ルクルスは一番端の座席に座り、バッグの中から新聞を取り出す。

「何々、世界三大香辛料といわれるシレシティア王国原産の黒胡椒（100gあたり200Az）が何者かによつて50%盗まれるという事件が発生。シレシティア警察は大型の魔獣ボケモンによる仕業と調査を進めている……か。まあいいや、他の記事を――

「ねえ君。この新聞、貰っていいかな？」

誰かが話しかけてきた。いつのまにか三軒過ぎっており、人も多くな

「はい、いいですよ。読み終わりましたし」

ルクルスは新聞を渡す。

「有難う」

そう言つてその青年？は去つて行つた。黒い体毛に赤く長い毛とそれを先で縛る玉、狐のような顔。ばけぎつねポケモン、ゾロアークであつた。

「おい、坊主！！」

「へ？」

向こう側の席に座つていたゴーリキーに声を掛けられた。

「何ですか？」

「何ですかじゃねーだろ！てめえ今？あくタイプ？に新聞渡してたろ」

「何か問題でも？」

「おいおい、最近のガキはそんな事も知らねえのか？」

「？」

ルクルスはゴーリキーの言っている事がよく分からず、首を傾げる。

「そんな事とは？」

「そんな事とはそんな事だ。あくタイプ下民に新聞を与えるなつて事だ」

「与えるつて……」

「おい、やめとけ」

ルクルスの斜め前に座つていた男？がそう言つてゴーリキーを突き飛ばす。

「グフツ……」

ゴーリキーは泡を吹いて倒れる。それを見てその男？は笑つていた。「有難うございました」

「ん？いいつてもんよ。それ以前にあのゴーリキーが悪いんだからな」

そう言つてその男らしい若者は去つて行つた。

最終的にパソコンのフォルダが表示される。そこをタッチすると『グースⅡログイア 許可』と書かれている。

「これは何だ？グース」

「簡単に言えば、その者がどの先輩に対しては敬語じゃなくてもいいかを確認する画面」

「そう。ルクルス君はグースさんと・・・ガルスト？・・・！」

「え、王女様からもOK出されてるの!？」

「・・・それよりも、黒色差別って？」

「あれ？習ってねーの？黒色差別っていうのh「先々代の国王が取り決め、現在の国王が三十年前に廃止したあくタイプ及びゴーストタイプを此処から排除しようとしたり、何らかの奴隷にしたりする」というもの。だがそれは現在の国王を含む数人がそれを非難し、現在の国王は実の父親を殺してまでこの制度を無くした、という事」

グースが言い始める前に、後ろから誰かが全て説明を終えた。

「君は確か・・・」

「ギールⅡリファンスです」

「ん、ああそう」

「すっかり完璧に説明したなあ」

グースはギールに感心している。

「お褒めの言葉、有難う御座います」

「いいのいいの。そうだ、君にも」

グースは自分の団員証を出して操作する。

「よし。もう敬語じゃなくていいよ」

「アリガト・・・グース、君」

「い、いや。別に」

グースの照れる素振りを見て、ルクルスはニヤツと笑う。

「ほお、グースはサディスティックなインテリ系ロリっ娘が好みですかあ」

「な!？」

ルクルスはニヤつきながらグースの耳元で囁いた。確かに、ギール

はグラエナの平均身長より低く、胸も多少あるが其処までとは言えない。

「何でサディスティックっていうのが入るんだよ!？」

「だって、あれは完璧さって感じだろ？顔とか」

「顔で判断すんな!!」

「おお、怖い怖い。で、その黒色差別つてのはもう廃止されたんだろ？」

「ああ。だけど、それに反対する連中もまだいるって事だろ」

「もういいでしょ？ 話続けて」

いい加減飽きてきたフィレンツェが言う。

「へーい。じゃあライブが終わった後のを」

[illegible]

ライブが終わった後、首都駅。二人は改札の前で話していた。

「じゃ、一人で帰れるよな？」

「うん」

「んじゃ、俺も直ぐ行くからさ。気をつけて帰れよ」

「わかった。じゃあね、ルツ君」

そう言つてフィナルは改札を通り、ホームに向かった。それを、ルクルスは見届けると、駅前の広場にあるベンチに座る。

「さてと、如何する？そこにいるのはとくのとくに気づいてるんだけど」

「ほう、
気づいていたか」

スツと木陰から誰かが出てくる。あの日のカルラドであった。

「そりゃ、気づくだろ。そんなに殺気だしてちゃ、ね」

騎士団本部の何処かにある一室。カルラドとシャードがいた。

「くっ、やはり、もう限界か……何か別の策を考えなければ、な」

「前も聞いたが何故だ？何故そこまでしてまで……」

「私はあの方と約束したのだ。この国の行く末を永久に見守ると」

「だが……」

「黙っておれ。もう戻ることはできないのだ。私の千年という長い時間は……」

カチツ、カチツ、と刻む時計の針が静かにその場に鳴り響いた。

ルクルスの休息。第一章終（後書き）

作「次回から第二章です」

ル「お楽しみに……。これって12話とまらないのか？」

作「オフコース!!」

第12話 開戦の兆し（前書き）

作「今回から第二章です」

ル「後一枚で僕は完全体に・・・」

作「ならねーよ」

第12話 開戦の兆し

ラグーア王国から北西49?に位置する大帝国、ヴォトクシア。其処は、貧富の差が激しく、民の税金は全て軍資金になっていく。その帝国の帝都、『ヴォトーク』の中心にある城、難攻不落ともいわれるその城の最上階にある帝の間では、一人欠けた七武将が並んでいた。

「帝様、申し訳御座いけません。カルラドを連れ戻す事に失敗しました」

左端に立っていたミュートが土下座する。

「気にするでない。カルラドとギディアの代わりはもう用意しておく」

奥間から声がする。どうやら帝の声らしい。ミュートは再び並ぶ。

「で、その代わりとは?」

右端に並んでいた者が言う。

「まあ慌てるでない。まずは?三種の獣神器?を揃えてからじゃ。そうじゃろ?ヴァーツ」

「.....」

ヴァーツと呼ばれた男は静かに右端に並ぶ。

「では、次はお前に任そうぞ。ヴァーツ、分かったな?」
「御意」

ヴァーツはそう言って窓から飛んでいった。

ラグーア騎士団首都本部地下三階、訓練場。ルクルスとフィレンツェが木刀を交わしていた。

「はあ!!」

「とお!!」

二人がぶつかる度にバチッ!!という音が鳴り、激しさがよくわかる。

「はあはあ……先輩には敵いませんよ」

「そういう事言ってる暇があったらもつと鍛える!!はい、腹筋と腕立て二千回ずつ!!」

「ええ~~~~~……はあ」

ルクルスは渋々、腹筋をやりはじめた。

「相変わらずハードな事させるねえ、怪我でもさせたらどうすんだか」

「ふ、ふん!黙ってるよ!!」

二人の後ろから誰かがやってきた。

百足のようなボデイに紅い体色。頭に生えている触角は鋭く光っている。メガムカデポケモン、ペンドラー。と、いつでも前足が少し浮いているので一応二足歩行である。

「?どちら様で……」

「ああ、紹介するよ。コイツは僕達と同じチームヘルファングの騎士、ヴィフォレ!!ソーリンク。戦場での異名は?紅き大戦車?」

「はは、何を言う。君だって?鼬に化けた死神?何て異名つけられるくせに」

「な、なにを!!」

ヴィフォレというペンドラーの言葉に、フィレンツェは怒りを抑えきれない。

「フィレンツェさん落ち着いて。で、ヴィフォレさんでしたっけ?ルクルスがフィレンツェを止めつつ言う。」

「そうだよ。えと、君が新しく入ってきた新人君?」

「はい。ルクルス!!ヴァロンです」

ルクルスは軽く会釈をし、再び腹筋を始める。

「で、何で此処に来た?確か君はレアシム支部で三種の獣神器の一

つである？蛇神の鏡？を守護している途中だった筈」

「上司命令だよ。レアシム支部長のブロームさんからの命令で、蛇神の鏡を本部に輸送せよってね」

「何故？」

「帝国軍が雇ったらしい海賊達が攻めてきたらしいんだ。数は25万。レアシム支部はほぼ壊滅状態」

「貴様、見捨てた訳では！！」

フィレンツェはヴィフォレの胸倉を掴む。

「ちょ、フィレンツェさんやめてください！！」

ルクルスがその手を引き離し、そこに割ってはいる。

「で、如何する？早くしないと大好きなお兄ちゃんが死ぬぞ。これは嫌味じゃない、本気で言ってるんだ」

「くっ、黙れクソ虫。ルクルス。騎士団長にコレを持って行って」

「え？」

「早く！！」

「は、はい！！」

ルクルスはフィレンツェから一枚の紙を持って走り去っていった。

「じゃあ、俺もちよっくら準備してくんな。じゃあな、フィレンツェ・・・ちゃん」

「！！」

ヴィフォレも訓練場を後にした。

「・・・」

フィレンツェは黙ってその場に立っていた。

騎士団本部地下六階、団長室。ヘルファングの談話室と同じように妙にゴツク調。

「で、これは？」

「フィレンツェさんが持っていていけと」

ルクルスはカルラドにさっきの紙を渡す。

「ほう、出撃許可願。場所はレアシム支部か。まあ、新人の強化にはキツイかもしれないだろう。ルクルス、これを許可とする。

今回はヘルフアング全員出動希望と書いてある為、君にも出撃してもらおう。いいな？」

「はい！！」

カルラドに敬礼し、ルクルスは立ち去ろうとしてドアに手を掛けるが、少し止まり、再びカルラドの元に戻る。

「如何した？」

「騎士団長、一つお聞きしても宜しいでしょうか？」

「ああ」

「三種の獣神器とは？」

「は！？」

ルクルスの言葉にカルラドは一瞬ずっこけそうになるが、直ぐ戻る。

「お前なあ……いいか、三種の獣神器とは創造神が創り出した三つの秘宝の事。荒地を豊かな土地に変える蛇神の鏡。触れただけであらゆる病や怪我也治す霊鳥の石。全てを粉碎する事が出来る魔犬の斧。この三つを持つ者はこの世の全てを手にする事ができるとされている。その内の一つ、蛇神の鏡が今さっき此処に運ばれてきたのだ。これでいいか？」

「ありがとうございます」

ルクルスはまた敬礼する。

「そうだ、準備が終わったらまた来てくれ。ある場所に行ってもらいたい」

「はい」

ルクルスは団長室を後にした。

「さて、俺も準備しないと」

そう言ってカルラドは窓を開けた。空には黒雲がいくつもあった。

第13話 出発（前書き）

フィナル「そろそろキャラ紹介2とか出した方がいいんじゃないの？」

作「それはそうなんだけど、色々あったから………」

フィ「ルツ君の？アレ？ね」

作「そう」

フィ「毎度毎度お疲れ様です」

第13話 出発

騎士団本部、チームヘルファング武具倉庫。此処にヘルファングの騎士達の武具がある。

「さてと、ルクルス君は自前の武具があるって聞いたけど？」

「はい。騎士団長が何かくれました」

「へえ、珍しい」

ルクルスとヴィフォレは此処で準備している。ヴィフォレは既に鎧を着ていた。紅色に光る鎧。

「じゃあ、俺は先行ってるから、早くこいよ」

「はい」

ヴィフォレはそう言って出て行つた。ルクルスも直ぐ着替えた。

「お待たせしました!!」

「おうきまつてんな。お、槍使いかい」

ルクルスの鎧は白く輝き、兜はまさに獅子を思わせるよう。手に持つ槍は黒く、所々蒼い装飾が成されている。

「どうつすか？」

「いいんじゃないか？俺が紅き大戦車なら、君は？白金の獣王？とでも言つたところかな」

「変な異名つけないでください」

ヴィフォレにキリツとルクルスは言う。

「はいはい。じゃ、もう行こう。俺らが最後だからな」

「あ、俺は騎士団長に呼ばれてるんで」

「そう。じゃ、地下7階の出撃口にな」

「はい」

ヴィフォレはそう言って去って行つた。ルクルスも団長室に急いだ。

団長室。ルクルスは再び此処に訪れていた。

「で、ご用件とは？」

「さっき言ったとおり、行つて貰いたい所がある」

「何処にですか？」

「此処から列車で30分の場所、パイレーツ・ユートピア海賊達の理想郷だ」

「パイレーツ・ユートピア？」

ルクルスは首を傾げる。

「ああ。その『狐の宴』という酒場でクラウンという男に会つて
コイツを渡して欲しい」

カルラドはルクルスに一通の手紙を渡す。

「……如何してです？」

「援軍を頼む」

「……！か、海賊にですかあ！？」

ルクルスは驚きを隠せない。

「それがどうかしたか？」

「いや、何で海賊に援軍を？」

「目には目を、海賊には海賊をつて事だ。何せレアシム支部は海の上に浮かんでいるからな。じゃ、頼むぞ。他の奴等には先に行つてもらふし、お前は用件が済み次第現場に向かえ」

「…了解」

ルクルスは少し嫌そうな顔をしつつ、団長室を後にした。

騎士団本部地下七階、出撃口。此処は、騎士達が現場に向かう時

に利用するいわいる巨大な車庫^{ガレージ}。フィレンツェ達チーム『ヘルファング』は此処にいた。

「えー？ルクルス君は別行動！？」

「どどど如何いう事ですかヴィフォレさん！！」

フィレンツェ及びフィナルはヴィフォレに詰め寄る。

「如何いうつて言われても……ねえ。俺は知らないから」

「納得いかぬ！！ヴィフォレ、しっかり説明しろ！！」

フィレンツェはまたもやヴィフォレの胸倉を掴む。

「フィレンツェ落ちて着け。此処で揉めている場合ではないんだよ」

「グ、グースさん」

フィレンツェはヴィフォレを離し、声の方向に向く。そこには、グースがいた。

「フィレンツェ。その正義感が良いが、感情が抑えられないというのは命取りだ。分かっているよね」

「は、はい………」

フィレンツェは俯く。グースはギールの方を向いて一瞬微笑み、また真顔に戻る。

「では、これよりレアシム支部へ向かう。今回の目的はレアシム支部を襲撃した海賊を一掃する事。では、出発しよう」

「えー？待つてください、ルツ君は！？」

「ルクルスは騎士団長の頼みで援軍を要求しに向かっている。後に俺達と合流する事になっているから心配しなくていいよ」

「はい！」

「いい返事だ。さて、と………」

グースは出撃口の壁を探る。

「ん。ここかな」

とある部分にグースの手が触れると其処が光り、壁が一気に動き出す。

「ふえええええええ！？」

フィナルは突然の出来事に驚き慌てる。

「さうて、乗り込むとするか」

「こ、これは……」

壁が動き、其処から出てきたのは巨大な飛行船。ホエルオーより三周り程大きい。

「これこそこの騎士団が誇る巨大飛行船、『SORABOUZU零壱』だ!!」

（だっせえ名前……）

グースがいかにも決まった感じに言うが、ヴィフォレは嫌そうだ。

「そういえば、このチームってルツ君も含めて六人しかないんですか？」

「いいや、正確に言えば11人。因みに、グースさんは此処のチームじゃないよ」

フィナルの問いにフィレンツェはサラツと答える。フィナルは納得したらしく、飛行船に乗り込む。

「……皆乗ったよね。では、目的地レアシム支部に向かって出発!!——あ、ヴィフォレ運転宜しく」

「へい」

こうして、ルクルスを除いた六人は、ラグーア王国北部にあるレアシム支部へと向かうのであった。

その頃ルクルスは海賊達の理想郷に着いていた。其処は、いかにも海賊がいそうな雰囲気醸していた。

「うわあ、此処が……とりあえずその酒場に行こう」

ルクルスは少し不安そうに足を進めていった。

そして。

「此処が『狐の宴』か」

ルクルスはあつさり着いた。そして、扉を開けた。

「おいでやす。お一人ですか？」

出迎えたのは和服姿のマニニューラであった。

「い、いえ。実はクラウンという方を探しているのですが…」

「わかりました。クラウンはんですね。付いてきてくださいな」

ルクルスはそのマニニューラに付いていった。

（何で和風なんだ？）

ルクルスは店内の感じが気になっていた。全体的に和室なのに、其処で酒を飲んでいるのは皆洋風 of 海賊達。明らか不自然である。

「クラウンはん。お客人です…どうぞお入り下さい」

そうこうしている内に着いてしまった。ルクルスは障子をスツと開けて、中に入った。

「君だね、ルクルス君は」

「え、何で俺の名前を？」

座布団に座っていたのは、黒い体毛に紫の長髪、その髪の前には珠で結んである。その狐のような外見は人を惑わすかのよう。ばけぎつねポケモン、ゾロアークの色違い。

そのゾロアークはいかにも海賊の船長みたいな格好をしていた。

この者がクラウンらしい。

「何でって、カルラドが君の事と援軍の事伝えに来たから」

「は！？じゃ、じゃあ俺が来た意味って？」

「おそらく色々な経験を積ませたかったんじゃないかな。あいつの事だし」

クラウンは微笑む。その表情はまるで女神のようだ。

（骨折り損の草臥れ儲け…）

ルクルスはガツクリと肩をおとす。

「そんな顔をするな。俺達の士気が下がっちゃう。そうしたら使いモンにならねえ」

「え？つ、つまり援軍の件は…」

「勿論OKだ。今にでも出発できるからささつと行くぞ。準備はいかい？」

「はい！」

「いい返事だ。じゃあこつから西にある俺の船まで行くか」

二人は店を出て船があるという場所に向かった。空は黒雲で真つ黒だった。

第14話 軋む心（前書き）

作「かなり遅れましたが更新です」

第14話 軋む心

巨大飛行船『SORABOUZU零壹』船内。グース達はとりあえず軍議をしていた。

「では、向こうに着いたらまず基地内にいる筈であるレアシム支部長を救出し、敵側の海賊達の動きを観察して報告。その後、ルクルス達が到着次第攻撃開始とする――」

「はい！」

全員の声が大きく響く中で一人、フィナルだけがボケツと窓の外を覗いていた。

「おい、フィナル！」

「……………」

グースの呼びかけも聞こえないのか、ただ窓の外をジッと見ていた。「如何したんだ？ たく……」

「そつとしておいたら？ 女の子には事情があるってもの……よ、グース君」

グースがフィナルを叱ろうとしたのをギールが止める。

「ギールが言うんだつたら……………」

グースは半ば納得がいけない様子だったが、渋々戻っていく。それをヴィフォレはニヤついた表情で見ている。

「では、これで終了とする。各自準備を整えておくように、解散ッ」グースは嫌な予感を感じていた。

全員部屋に戻っていく中で、やはりフィナル一人がその場に残っている。それを見たフィレンツェはそつとフィナルの隣に座る。

「どうしたの？ らしくないじゃないか」

「フィレンツェさん……………」

「戦場でそんなぼけつとしてたら殺されちゃうよ？ ほら、ちゃんとして」

「すみません。私……………」

「いいのいいの。で、如何したの？やっぱルクルス君の事？」

「フィナルは頷く。それから少しして、

「実は、昨日昔の夢を見ちゃって……………」

「それとどんな関係が？」

「その夢の内容が昔のロメパンの事でして……………」

「へえ……………」

「……………」

「……………」

沈黙が続く。が、それを破ったのはフィナルだった。

「実はロメパン…………いやルツ君は昔、いじめられていたらしいんです」

「え、嘘だろ！？」

「私もしつかりとは知らないのですが……………」

フィナルはゆつくりと話し始めた。

それとほぼ同じ頃、黒狐海賊団の母船『真の夢現』の船長室。

「……………ぬぬぬ、これは一体」

「さあ、如何する？」

「これだ、王手……！」

「甘いな、こっちはこうして……………はい、王手。で、つみ」

「ぬわあああ……！つ、強い」

クラウンとルクルスは暇つぶしで将棋を楽しんでいた。結果は10戦10勝でクラウンの勝ち。

「フツ、まだまだだ」船長……！急いでお仕度を……！」

クラウンの部下らしきズルズキンが慌てた様子で報告しにきた。

「おいおい、まだ着かないだろう？」

「て、敵襲です……！」

クラウンは急いで外に出て望遠鏡を覗く。すると、その先にエアームドの大群がこちらにやって来ているのが見えた。エアームドの胸にはヴォトクシアの紋章。

クラウンが無線に怒鳴る。無線で全ての船に伝えているのだらう。

「あ、そうだった。お前はまず俺等の戦いを見て、自分も加戦できそうだったら入れ。わかったな？」

ルクルスは自身の槍を持って外に出た。

其処はもう戦場であつた。敵軍のエアームド達のエアスラッシュや剣が飛び交い、電気を帯びた弾が飛び、敵に当たつてその敵は海に落ちる。

ルクルスはそれに見入っていた。するとそれに気づいた敵兵がルクルスに突進してきた。

「！！しまった」

ルクルスは目を瞑る。数秒経つが痛みはこない。ルクルスがそっと目を開けると、

「ひ、ひぎゃ、何だ、これ？、か、体がと、溶ける、溶け、ととと
とととひぎゃあああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
あああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

突っ込むはずだったエアームドが奇声をあげて倒れた。が、勿論溶けてなどいない。

「え？どどど如何いう事？」

「だから最初は見とけと言ったろ？」

「うわ！！お、脅かさないで下さいよ！」

ルクルスの裏からぬつとクラウンが出てきて言った。

「あのな、殺されかけてたお前を助けた人に言うもんじゃないだろ？」

「え、じゃあさっきのは……………」

「そう、俺ら一族が持つ幻影の能力だ。対象の相手にしか映らない優れものってやつ」

クラウンは自慢げに言う。

「んじゃ、お前はとりあえず隠れてろ。もう手間掛けさせんなよ、ホント困るから」

「…はい」

クラウンは追いやるように言った。

ルクルスはゆっくりと歩きつつ、ある事を考えていた。

（手間か。迷惑かけちゃったな…これじゃあ俺…………いや、役立たずにならない様にできる事だけでも…………無い、かあ）

ルクルスは溜息を吐き、扉に手を掛ける。その時だった。

「見いつけた。久しぶりかなあ、子猫ちゃん」

「！！何でお前が…」

その肩をポンと叩く者がいた。ルクルスが振り向くと、そこにいたのは帝国七将の一人、ミュートであった。

「今日はどうやって遊ぼうかあ？ま、どのみち君は僕に殺されるウン・メ・イにあるんだーけどね」

相変わらずの口調で言うミュートは不気味な笑みを浮かべていた。それはまるで悪魔の様であった。

第15話 乱れ咲き（前書き）

ル「よし！！約束の15話目だぞ」

作「そうっすね」

ル「大丈夫だろうな？」

作「ま、まあね。ではどうぞ」

第15話 乱れ咲き

ルクルスは一旦仰け反り、態勢を整えた。

「何故お前が……」

「何故つて、君を殺す為に決まつてるじゃん。後コノ前の仕返し。それ以外に何かあるう？」

ミュートはケラケラと笑う。

「この前は連れて行ってなかったか」

「え、そうだったけえ？ま、いいじゃん。ほらあ、早く僕と戦おうよ
お」

「ルクルス、お前下がつてろ！！」

クラウンは二人が接触している事に気づき、自身のサーベルを構えてミュートに突進した。

「おっと、邪魔しないでよお。殺しちゃうぞ?」

「しまつ」

「やめろお……!」

「うあ！おっととお、お見事」

ミューアの薙刀がクラウンに振り下ろされる。が、ギリギリのところでルクルスの槍が薙刀に当たる。それと同時にクラウンは後方に吹き飛ばされる。

「やめろ……」

「クフフ、そうそうもつと怒りなよお？弱虫ライオン君？だっけ？」

「!？」

ルクルスは最初、理解ができなかった。が、

「よわくないよ、ぼく、ぼくはよわくないよ？」

「ほお、これが……じゃ、もつと言ってあげるよお。弱虫ライオンは何も出来ないし、誰も守れない役立たず♪」

ルクルスの様子が激変すると、ミュートはさらにその言葉を言い続けた。

た。

「さあ、演劇^{ショー}の始まりだ。大人しく首を差し出せ」

「僕はまあだ殺される気は無いからねえ、ここらで御暇させてもらうよお」

ミュートはスウツと闇に消え去った。

「チツ、逃したか。まあいいか、この五月蠅い鳥共でストレス解消させてもらおう」

「ミュ、ミュート様がない！！」「俺等は一体どうすりゃいいんだ！？」

ミュートがいなくなった事で敵のエアームド達は戸惑い、焦り、陣形が崩れていた。

「おい、其処の鳥さん達い、俺と遊ぼうぜえ！！」

「！？あ、あれは騎士団！！全員戦闘態勢！！」

其処に、船のマストからルクルスが話しかけてきた。

「ん？あんまりくつつかれてても殺り難いんだが…ま、直ぐ終わらそう」

「全軍突撃！！」

ルクルスはエアームド達がこちらに突進してくるのを確認すると、スツと空に飛び上がる。

「蒼雷天竜撃 仙人掌 伍ノ形！！」

「ひ、ひい！！」

「助け」

ルクルスの周囲に蒼い電流が渦巻く。そして、ルクルスの掛け声と共にその電流は無数の蔓となり、敵に襲い掛かった。敵兵に巻きつき、飲み込む。それはまるで生き物の様。

「完成だ」

そして、その蔓達は敵を全て飲み込むと、綺麗に先が開き、大輪の蒼い花がいくつも咲いた。

「！！」

「ルクルス！！」

その花が消え去ると同時にルクルスはその場に倒れた。クラウンが駆け寄る。

空は晴れ渡り、陽が落ち掛けていた。

第15話 乱れ咲き（後書き）

ル「……………」

作「あの…ね、これには訳が、ね」

ル「かけえ!!」

作「え、気に入ったの？なら…いいや」

ル「何かとお詫び申し上げます」

第16話 嵐の前の静けさ

ラグーア騎士団本部、の何処か。ここにカルラドは来ていた。

「ブエリース、シャードの具合はどうだ？」

「又又又…やはり限界が近づいているようですね。無理もない、何せ武獣でもないのに千年程寿命を持つなどとしたのですから」

ブエリースと呼ばれた男は寝たままの状態のシャードを見て言う。

「ではやはりもう生きられんのか…」

「はい、残念ですが。けれど今は後継者の問題です。筆頭軍師様がお亡くなりになられてはこの国の政治は誰が行うのです？国王様は戦の事以外は先代に教えて貰えず、それをフォローする為にシャード様が今まで行っていたのですよ？一番弟子のグースはまだまだ未熟ですし」

「どうしたものか…」

「あ、すみません……………わかった。騎士団長、今連絡が入りました」

「何だ」

「ルクルスⅡヴァロンが黒き雷の竜神の力を使った事です」

「それは本当か！？」

「はつきりとはしていませんが。しかし、まさかこんな早く……………」
ブエリースは俯きながらその場を去った。

「まずいな…このままでは」

その頃、飛行船SORABOUZU船内では。

「まもなく目的地です、皆直ぐ出撃できるように」

「はい!!」

全員が準備ができ、支部まであと少しという場所まで来た。

「グース、お茶だ」

「悪いな、ヴィフォレ」

二人は会議室である事を話し合っていた。

「…つまり、霊鳥の石を探し出せるのはセーナムルヴだけなんだな」

「ああ、獣神器はそれを司る大いなる者にしか探し出せない。現に、蛇神の鏡もケツアルコアトルの協力によって手に入れられた。それより今はルクルス君と合流する事が先決」

「ん…本部からもルクルスの覚醒の知らせが来ているしな、万が一の事を考えると……」

「そうだな。さて、レアシム支部の近くにはどんな観光スポットがあるかなつと」

「はあ、お前な…戦いに行くんだぞ？」

楽しそうなヴィフォレを見てグースは溜息を吐く。

「……!!おい、グース」

「何だ？」

「ルクルス君達との合流ポイント兼前線基地があるこのホヌイクシティってさ」

「それが何だ？」

「此処、ウルガモス太陽蛾信仰の町だって。大丈夫かねえ」

苦笑するヴィフォレは観光マップをテーブルに置いて其処を立ち去る。

「ルクルスが危ない!!」

グースは急いで会議室を去った。

「あーあ、行っちゃったよ。過保護だなあ、こんぐらいのピンチは新人君自身で解決させなきゃねえ」

頭を抱えるヴィフォレであった。

その頃、母船内では。

「大丈夫かルクルス」

「は、はい。まだ頭が痛いですが」

ルクルスは船員室のベッドで寝ていた。傍にはクラウンが座っている。

「ルクルス殿、お薬を」

「大丈夫ですよセシルさん。それよりあなたの怪我だって」

ルクルスにセシルと呼ばれたエアームドは一礼してその場を去った。

「いやあしかし自分を殺そうとした奴を部下にするとはな」

「部下何て人聞きの悪い言い方はよして下さいよ」

ルクルスは苦笑する。そう、先ほどのエアームド、もといセシル「クレファンスはあの時ルクルスに突進してあえなくクラウンの幻影にやられたあのエアームドである。

あの時ルクルスの技に運良く当たらなかったセシルは戦いの後、ルクルスに部下にしてくれと頼み込んだ。それをルクルスは受け入れたのであった。

「はは。さて、もう直ぐ合流地点のホヌイクシティの港だ。準備しとけよ」

「はい。セシルさん、俺の武具を持ってきてくれないかな？」

「かしこまりました、只今お持ちします」

セシルは急いで出て行く。ルクルスはベッドから降りて背伸びをした。

「結局部下のように扱うんだな」

「？仲間？ですよ」

クラウンは呆れ顔で部屋を後にした。

それと同時刻、レアシム支部の周りの海。そこでは、帝国が送り出した海賊とレアシム支部の騎士達が対戦していた。

「怯むな！！援軍が来るまで耐えろ！！」

「し、しかしもう限界です！隊長、ご決断を！！」

「くっ、これまでなのか…」

二人の騎士が追い詰められ、諦めかけていた。

「せめてあの事を本部に知らせ！！」

「隊々！！」

二人の首がとんだ。無残にも胴体は立ったままである。

「たくっ、知られちゃ困るっちゅうのによお。ホント、ラグーアの騎士は面倒」

一人、大鎌を担いで欠伸をする者がいた。戦争の中で、そこだけ静かであった。

第17話 静寂、絶望、微笑（前書き）

作者「王手、桂馬取り!!」

ルクルス「またかぁ!!」

クラウン「…どうやったらこんなに負けれるんだよ」

ルクルス「もう一回!!」

作者「まだやんの…?」

第17話 静寂、絶望、微笑

レアシム支部より北東に約2〜3?。ここに、怪しげな雰囲気が漂う古ぼけた屋敷があった。

その屋敷には誰も近寄らず、ただ其処にあった。

「やっとなつたねえ」「そうだねえ」

その屋敷の門の前にフツと青白い炎が現れた。

その数はどんどん増えていき、門の前はその炎で埋め尽くされた。

「駄目じゃない、お母さんの後ろにいなきゃ」

「「ごめんなさい」」

その後ろから現れた橙炎が炎たちに言う。炎たちはそれに謝る。

「これハお久しゅう御座ひますナあ」

「あら、紅葉さんではな^{くれは}いですか。ご無沙汰しております」

屋敷の扉が開き、何者かが出てきた。橙炎に紅葉と呼ばれたその何者かは影に隠れて姿は確認できない。

「それよりも、例の事に関してハ上手くいつておられます哉?」

「ええ、勿論。では、立ち話もこの辺にして…」

「分かりました、ではご案内致しませう」

炎達は紅葉に着いていった。その直後、その場の植物が全て、枯れてしまった。

巨大飛行船『SORABOUZU』船内。

「皆、準備できたか」

「「はい」」

「では、?落下?準備!」」

「準備良し！！……え！？」

グースの落下という言葉に一同（ヴィフォレ以外）は驚く。

「では、落下！！」

「「ちょ、k」」

グースが手元のレバーを降ろした瞬間、飛行船の底が開き、全員が落下した。

「ここからは戦場だ、皆油断するなよ！！」

「え、合流は！？」

「戦いが終わった後だ！！」

「フィーちゃん早く武器構えて！！」

「う、うん」

そして、全員が地面に着地した。

「では、散！！」

グースの掛け声と共に、皆が駆け出した。

その頃、ルクルス達は…

「もうすぐレアシムに着く。皆準備はいいか！！」

「オオオ！！！！！！！！！！」

「ニユーヨークに、行きたいかあ！！！！」

「オオオ！！！！！！！！！！！！！！！！」

（何コレ。てか何でニユーヨークの方が大声？）

クラウン達の掛け声にルクルスは呆れていた。

「よし、上陸だあ！ルクルス、おめえは安全を考慮して先頭で行け

！！」

「本当にそれ安全を考慮しているんですか？」

「黙ってさっさと行け！！」

「…分かりました」

クラウンに怒鳴られ、外に出たルクルスは驚くべき光景を目にした。
「な、これは……………」

「ひでえ……………」

其処はまるで地獄のようであった。

互いの兵の死体があらゆるところにあり、レアシム支部の騎士達の死体には首が無かった。

「ルクルス！！」

「グース！！」

すると其処にヘルファングの面々がやってきた。

「グース、一体これは……………」

「分からん。だが一つ分かるのは、レアシム支部が負けたという事だ」

グースは歯を噛み締めて言った。

「ふゝん、君達が本部最強のエリート部隊『ヘルファング地獄の牙』か。弱そうだな」

「！！！」

その声の方向に皆が振り向く。

其処には、オコジョのような姿で、鞭の様体毛を備えた腕がある。長身なその姿は武道家にも見えなくもない。

ぶじゅつポケモン、コジョンド。

そのコジョンドは黒い鎧を身に着けており、鞭のような体毛がある部分にはそれと同じ大きさの鎌が装着されている。

「貴様、七将だな？」

グースがコジョンドに言う。

「正解。そう、僕はヴォトクシア帝国軍七将、コーネリシア＝ブラッカス。何か最近ボクッ娘ていうのが流行ってるらしいけど、僕はちゃんとした男だ。そこんとか間違えないでくれ」

「ほう、では貴様がこいつらを？」

「それはハズレ。僕が此処にきた時にはこんなだったよ。それより

もさ、僕の質問にも答えてくれる？」

「何だ」

コーネリシアがグースに問う。

「其処にいるレントラーってさ、もしかして黒き雷の竜神の？ 後継者？ なのかい？」

「……！ そ、それは……」

「おい、如何いうことだ……！」

ルクルスに問われるが、グースは黙り込む。

「ふゝん、答えられないのか。それなら、ソイツの身体を裂いてみようか、な……！」

「やめろオ……！」

コーネリシアが猛スピードでルクルスを襲おうとした。が、

ガキンッ……！！

鋼の音がした。ルクルスの前に何者かがコーネリシアの鎌を日本刀で交えている。

海獣のような姿。深い青の体毛。貝のような鎧がついた四肢。顔には立派な白い髭。

かんろくポケモン、ダイケンキ。

そのダイケンキはカルラドと同じようなデザインの着物を着ており、首に切られたような古傷があった。

「何者だ？ 僕の邪魔をしないでくれるかな」

「そうはいかないねえ、俺の城で子どもを殺そうなんて事やらせる訳にやいかないんでね」

「お前……ルギア信仰の生き残りだな？ 其処にいるフタチマルの娘もコーネリシアは一旦ダイケンキから離れて言った。

「ふゝん、知ってんだな、俺達の事。珍しい奴だ、なあフィレンツエ」

「………そうだね」

フィレンツェは空を仰いで言った。

「……ルギア……信仰」

一方グースは啞然とした様子で言う。

「ハハハ、それが最もな反応だ。だが、今はそんな事言ってもらえねえぜ、本部の見習い軍師さん」

「知っておられるのですか」

「そりゃね。だけどそれならお前さんだって知っていた筈だろう、レアシム支部長フェルサーテ。ヴィレアは歴史上で一番恐れられたルギア信仰の教祖、ルドルク・ウェスカティンの子孫である事を」

「フェルサーテは笑いながら言った。
「いつまで話しているんだ。今お前は僕と対戦している最中だろう？」」

「悪いな。じゃあ続きを始めようか」

その刹那、辺り一面闇に包まれた。

「おやおやコーネリシアさん。仕事の途中で何をしてゐらつさるのです哉？」

「すみませんね。つい、疼いてしまつて」

闇の中から何者かが姿を現した。

白い身体。言葉では言い表せないような人のようにも見える身体。頭から生えている小さな氷柱。顔の仮面らしき部分から伸びる手。その奥から見える闇色の顔。

ゆきぐにポケモン。ユキメノコ。

そのユキメノコは赤を基調とした着物を着ていた。

「……！新手かあ。しかも美人（萌）」

バチン！！

「痛……！何すんだよ……！」

「……」

ルクルスの顔にフィナルのピンタがクリティカルヒットした。

「ふふふ、お初に御目に掛かります。ヴォトクシア帝国軍筆頭軍師
及び丞相、^{みやなぎ}観柳 ^{くれは}紅葉と申す者で御座ひます。以後、お見知りおき
ヲ」

紅葉はニコツと微笑んだ。その微笑は全てを飲み込むようであった。

第18話 陽は陰る（前書き）

ル「タアアジャアアドルウウ」

作「どうした？」

ル「オーメダル欲しい」

作「無理を言うな」

第18話 陽は陰る

紅葉はスツとルクルスの眼前まで迫ってこう言った。

「怒りで自分ヲ忘れてはゐかむよ。二竜の力はそれほどまでに恐ろしひから。決して、大切な人ヲ傷つけてはならむからネ」

「は、はい……………」

その言葉はまるで自分の子どもを叱る様であつた。

「では、コーネリシアさん。仕事に戻りませう」

「……………嫌です。紅葉さんは先に戻っていて下さい」

「…帝様の逆鱗に触ればあなたハ殺されてしまひますヨ?」

「別に。それに?援軍?も来たみたいだし」

「……………仕方ありませんむ、私ハ帰りませう」

「有難う御座います」

紅葉は闇の中に消える。それと同時に闇も晴れる。

「おや、楽しそうな事やってんなあ、俺も混ぜてや」

「……!」

裏の方から声がした。それと同時に皆の首筋に刃物のようなものが宛がわれる。

「おっと、動いちゃ駄目だぜ。大人しくしていて貰おうか」

「遅かったなあ、ディサイル。何をしていた?」

「何って、雑魚退治ですよ」

コーネリシアにディサイルと呼ばれた男は支部の騎士の死体を指差して言った。

赤い甲冑のような身体、刃物のような腕。その姿が映すのは悪人か、善人か。とうじんポケモン、キリキザン。

そのキリキザン、もといディサイルはその身体にさらに鎧を着ていた。

「貴様!!俺の部下を雑魚だと!!」

「フツ、雑魚に雑魚と言つて何が悪い」

「何！？てめえ、ふざけるな！！」

「動くな！！」

「くっ……」

フェルサーテがディサイルに襲い掛かろうとするが、首に宛がわれている刃物がある為動けない。

「さてと、そろそろ僕も飽きてきちゃったしな。始めようよ、殺し合い。ディサイル、部下を退かせろ」

「はっ。お前ら、退け」

ディサイルが命令すると、ルクルス達から刃物、いや刃物の腕をコマタナ達が離し、ディサイルの方に戻っていく。それと同時にその後ろに約五千〜六千程のコマタナ達が集まってきた。

「さて、こんな感じじゃないと楽しくないでしょ？ほら、始めよう」
「クラウン殿でしたっけ？」

「ああ、何だ本部の軍師」

「あなたの直ぐに部下全員を連れて来て下さい。その頃にはもう始まっています」

「分かった。ちょっと待ってる！！」

クラウンは船の方に戻っていった。

「とりあえず、俺達だけでどうだ？」

「別に。僕は見物してるだけだしね。ディサイル、もういいよ？」

「はっ！！跡形もなく切り刻んでやろう、突撃！！」

コマタナ達がルクルス達の方へ走っていく。

「来るぞ！構えろ！！」

「んな事分かってらあ！！」

「おいルクルス！！たくっ、仕方ない。いくぞっ！！」

ルクルスが一足先に敵軍に走っていく。それに続いて皆も向かっていく。

「やっとな戦える、そんな時に待ってられるか！！」

「ヒギッ！！」

「おらあ！！！！」

ルクルスは槍を振り回し、突き、

「ていや!!」

「ギャ!」「フェ!」

「よ、よし!!」

フィナルは剣で斬り、

「……………」

「ぐ、ぐるじつ、グハあ!!」

「次は、誰?」

ギールは鎖鎌で、

「今年の新人は凄いなえ、ま、俺程じゃあ無いな!!」

「ヴj!!」「dst!」「fp」

「まだまだあ!!」

ヴィフォレは突進と毒液で、

「地獄への片道切符を受け取りな!!」

「iy」「hk」「死にt」

「次は誰かな?」

フィレンツェはホタチを改造したもので、皆、各々の得意な武器で敵を倒していく。

「俺は戦いとか専門外なんだがな!!」

「ふy!」

グースも爪や扇で応戦していた。

「くつ、コーネリシア様、奴ら強いです!!」

「ふーん、中々やるじゃないか。僕も少し遊んでこようかなつと!!」

「コーネリシア様!?!」

見物していたコーネリシアはひょいっと跳び、グースの前に着地する。

「!!」

「やあ、調子どう?僕とちょっと遊んでみようよ……………さあ!!」
「な!?!」

コーネリシアが闇に包まれる。そして、闇が内側に飲まれ、其処から出てきたのは黒い羽衣を纏い、腕の鎌は消え、代わりに巨大な鎌を持ち、その眼は真赤に染まったコーネリシア。

「じゃあ始めよう。君は僕をどれだけ楽しませてくれる？」
まるで、悪魔の様であつた。

その頃、ラグーア騎士団本部、騎士団長室。カルラドは黒電話で何者かと対話していた。

「やはり命刻みの橋が冥界への扉という事だな？」

『はい。其処から無数の炎が浮いているのが目撃されています』

電話の声は透き通った女性の声。

「では引き続き調査を頼むぞ。ムトナ＝ローヴィレス」

『はっ』

カルラドは受話器を戻し、窓を開けて空を仰ぐ。太陽が黒雲に隠れかけていた。

第19話 影（前書き）

ル「段々タイトルが雑になってきてるな」

作「気のせい気のせい…」

第19話 影

それと同時刻。命刻みの橋。此処は、いつも霧によって視界が悪く、事故が多い事で有名な心霊スポット。そして、カルラドやルクルスの両親が行方不明になった場所である。

「隊長、これからどうするんです？」

「とりあえずは待機だ」

「ええ！？」

「仕方ないだろう」

部下らしきマラカッチがワサワサ揺れながら言っている。その横で煙管を咥え、腕組みをしながらその部下と話していた者がいた。

竜のような身体、体色は黄緑、眼には赤いレンズのような膜。精霊という名に相応しきその姿は何を思う。せいれいポケモン、フライゴン。

そのフライゴンは神父のような衣服を着ていた。

「ですが、凄い偶然ですよねえ」

「何がだ」

「今年の新人の中に隊長と同じ名前で同じ種族の子が第二小隊に入ったそうですよ」

「で？」

「でって……ねえ」

マラカッチは苦笑する。

「この世の中にやどんな奴がいるなんてわかりやせん。同じ名前だったりする事が無い訳じゃあない」

「そうですかねえ、ラグーア騎士団本部第五小隊『ブラッドリング』の鬼、ムトナ隊長」

「鬼ってなあ……」

ムトナと呼ばれたフライゴンはフツと笑う。

カルラドと電話で話していた本人である。

「しっかし何も出てこねえな」

「そういうもんですよ」

「それにしてもな……………」

そんな事を二人が話していると、橋の方からヴァイオリンの音色が聞こえてくる。

「何だ、この音色……………」

「綺麗ですねえ……………」

そう言いながら二人はその場に倒れてしまった。

「はあ…ラグーアのイヌにもここまで知られてしまうとは…このままでは冥界の存在が世間に知れ渡るのも時間の問題。それに、各国の重要人物と関わっている証拠が万が一外部に漏れたらまずいですなあ」

そう呟いた男は二人を担いで再び橋の奥へ消え去った。

グースは追い詰められていた。着ていた法衣もあちこちボロボロになり、少量だが右腕からも出血していた。

「ハアハア……………」

「おやおや、もう終わりかい？弱いねえ、がっかりだよ」

「俺は、軍師、だ、戦いは、不向k「僕だつて軍師だけど？」

「な！？」

コーネリシアはグースの方にゆっくりと歩き出す。

「フフフ…そう、僕は軍師だ。だけど君とは違う。そんな固定観念には囚われたりしないんだよ」

「黙れ、他人^{ひと}の勝手だろ」

「そう言うなら僕はこれ以上言わない。けど、そのままだといつか大切なモノを失うよ。それでもいいなら別に無理強いはいしない」

「貴様に指図などされてたまるか!!」

グースはコーネリシアの腹に思い切り短刀を突き刺す。が、血は流れない。

「嘘、だろ…だつてしっかりと刺した筈……………」

「話の続きだ。しっかりと経験を積み、鍛錬すれば…」

「あ…ああ……………」

グースは突然震えだす。

「そうすれば誤って、敵の腹ではなく自分の手に短刀を刺してしまう事、なんて無いんだよ」

「あ…ひゃ、ひ、うわあああああああああ…!!!」

コーネリシアが掴んでいるグースの左手には短刀が貫通しており、大量の血が出ている。それに中の肉…

「さて、どうしようか。このまま短刀をおろせば君の手はポロンと地面に落ちるよ」

「ヤメロ…やめてくれえ…!!!」

グースは泣き叫ぶ。そしてコーネリシアが短刀を持ち、そのまま…

ポトンッ

何かが落ちた音がした。が、それはグースの手では無く、コーネリシアの、左腕だった。

「大丈夫かグース!!」

「ルクルス!!」

そう、コーネリシアの腕を切り落としたのはルクルスであった。

ルクルスはグースのもとに駆け寄り、止血して短刀を抜き取り、包帯を巻いた。

「よし、こんなもんだろう」

「さんきゅ。だが、コマトナとかは…?」

「とつくに倒したし、あのキリキザンは逃げたし」

ルクルスは笑って言う。

「チッ、役立たずめ。まあいいや、あんな奴はすぐ見つかるし、こんな腕だつてねー!」

「おいおい嘘だろ……」

「凄まじい治癒能力……」

コーネリシアの腕があつという間に元に戻る。

「さて、続きを始めよう」

「グース、今度は俺がやる」

「悪い……が、気をつけろ、あいつ、中々やるぞ」

「まあ観てろつて」

「今度は君か。二竜の力、見てみたいねえ」

二人は武器を構える。雷鳴が遠くの方で鳴り響いていた。

その頃、とある山奥……

「はあはあ、あなたですか、セーナムルヴは」

マントで身を包んだ男は眼の前にいる巨鳥に言った。

『ふむ、基本的にお前らに力を貸す気は無いのだがな。どうやら訳有りのよう、内容によっては助けてやらん事もない。ほれ、話してみよ』

「はい。実は………」

男は話し始めた。

第20話 紫陽花（前書き）

ル「今回はやけに遅かったな」

作「そ、そう言わないで、ね？」

第20話 紫陽花

其処は、闇に包まれた場所であつた。音も、光も、何も無い。

「こ、此処は……？」

ムトナが眼を覚まし、辺りを見回す。が、何も無い。誰も居ない。

「アイツは……？」

「あのマラカッチなら我らの大いなる理想郷の礎になって貰いました」

「！？」

闇から何者かが現れた。人のような体型、黒き身体、白い髪のようなもの、そこから妖しく光る蒼眼。

あんこくポケモン、ダークライ。

そのダークライは白いローブを纏っており、背中には巨大な天使の翼。左手に黒いヴァイオリンと弦を持っていた。ムトナ達を連れ去った犯人である。

「貴様……！！」

「我が名はパールベリト。これより貴様には我らの大いなる目的の為に、使わせてもらいます」

「何……」

パールベリトはムトナの額に手をかざす。すると、ムトナの額に青い魔方陣が浮かび上がり、そこから本が一冊現れた。

「フフフ……」

パールベリトはその本を手に取り、本を開く。そして、ページを捲つていき、とあるページで手を止めた。

「あなたは少し強く、大体の地位もあるみたいですねちょっとばかり使わせて貰いましょう」

パールベリトはそのページの最初の行に書いてある *feeling* という文字に手を触れる。

すると、文字がばらけて消えてしまう。

「これで貴様は私の操り人形。存分に楽しませて頂きますよ……」
「はい、ご主人様」
ムトナの眼からは光が失われた。

一方レアシム支部。

「くっ、速い!!」

「ほらほらあ!!こんなもんかい?」

「まずい、ルクルスの野郎押されてやがる……クラウン殿も戻ってこないし……」

ルクルスは圧倒的に押されていた。コーネリシアの斬撃は速く鋭く、確実にルクルスの身体にダメージを与えていた。

「こんのっ!!」

「おっと。だけど格が違うんだよねえ、格が!!」

ルクルスはほんの少し押し返しもあるが、コーネリシアには通用しない。

「このヤロ、弱点とかないのか!?!」

「甘いねえ、そんなのに頼っちゃ駄目でしょ!!」

コーネリシアは余裕の笑みをうかべている。

「こうなったら……」

ルクルスは眼を瞑り、深く息を吸う。ルクルスの身体に蒼い電流が集まっていく。

「ふん、黒き雷の竜神の力、ねえ。ミュートも見たって言ったね。けど、僕には効かないよ?」

「………竜神?何だよそれ。あの兎に見せたのも俺のオリジナルだぜ?」

眼を開き、ニヤッと笑うルクルス。コーネリシアは余裕の表情でそ

れを見ている。

「んじゃ、充電完了って事なんで。その眼によく焼付けな!!」
ルクルスは口から電気の球を連続で打ち出していく。が、コーネリシアは軽く弾いていく。

「こんなこけおどしみたいな技で、何がしたいんだい？」

「へっ、こけおどし何かじゃあないぜ。まわりをよ〜く見てみな」
「何ッ!？」

コーネリシアが焦って見回すがもう遅い。弾かれた球はその瞬間電気の杭となって地面に刺さっていた。

「こんなものッ!!」

「無駄だ」

「な!？」

コーネリシアが杭を壊そうと鎌を振り下ろすが、杭は壊れない。

「蒼雷華 紫陽花 弐乃方!!」

杭から電流が放たれ、他の電流とも繋がっていく。ドームのような檻となる。そこから電気の花が次々に咲いていき、コーネリシアを包み込む。巨大なアジサイとなり、輝きが増した。そしてアジサイは枯れおちる。その跡に残るのはコーネリシアの形をした、シミ。

「や、やったなルクルス!!」

「お見事っ」

コーネリシアを倒したルクルスのところに皆が集まってくる。が、
「ウグルルルアアアアアアアア!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「!?!」

「ロメパン!？」

同刻、ラグーア騎士団本部、騎士団長室。

「騎士団長、シャード様がお戻りになられました」

「わかった」

カルラドは歯軋りをしながら外に出る。

「今戻りましたよ、カルラド」

「お前なあ、あんな状態で外に出るな…ど…？」

カルラドは啞然とした。シャードの後ろに、巨大なピジョットがいたのだ。

「こ、コイツは…」

「あ、忘れてました。この方はセーナムルヴ。私の寿命も僅かながら増やして貰いましたし、？霊鳥の石？探しにも協力して下さるそうです」

『御主がカルラドか。話はこの者から聞いておる。役に立つかどうかは分からぬが、御主らの力になるう』

「は、はあ」

凜々しきその姿は、まさに霊鳥と呼べるものであった。

第20話 紫陽花（後書き）

作「ちなみになるーくすはコジヨンドを嫌ってはおりませんので!!」

第21話 眼（前書き）

作者「久々すぎる更新です。さらに短いです（汗」

第21話 眼

霊鳥セーンムルヴ。サエーナと呼ばれる樹に住む巨鳥であり、五彩七色に揺らめく鶏冠や尾を持ち、その色はそれぞれ仁・義・礼・智・信を表すとされる。英雄に仕えたともいわれる。

カルラドとシャードはセーンムルヴの背に乗り、何処かへ向かっていた。

「で、セーンムルヴよ。お前は霊鳥の石が何処にあるのか分かるのだな？」

『…さあな、我が最後に見たのは364年前の師走。今その場所にあるとは限らぬ』

「364年前と言うと…ニンゲンの暦、西暦でいう2012年の十二月。この世界からニンゲンが消えた月だな」

『うむ。あの時、異変を感じ、見に行った。それが最後だ……！！』
セーンムルヴは黙り込む。

「どうして！！」

急に前方からあくのはどうが打ち込まれてきた。セーンムルヴは軽く避ける。

「敵襲か！？」

「ほほう、やり手ですか？」

「嬉しいね、あんたに褒められるとは」

スツと目の前に何者かが現れる。

竜のような姿。黒い体毛のような鱗。腕の部分には竜の顔。不気味な翼。

きょうぼうポケモン、サザンドラ。

「俺はヴァーツ＝マギナリシウス。帝国七将の一人だ」

ヴァーツと名乗ったサザンドラは怪しげに揺らめいている。

「シャード。ここは俺が」

「分かりましたよ。セーンムルヴ殿、行きましょう」

『うむ、分かった』

セーナムルヴは大きく旋廻して飛んでいく。

「おい待て「おっと、お前の相手は俺だが？」

そちらに気をとられていたヴァーツはカルラドに気づく筈も無く、思い切り踵落しを受けて地面に叩きつけられる。

「ゴフツ、てめえよくも…」

「…で、どうする、諦めて帰るか？」

「いや、貴様は俺の手で葬ってやるよ」

「青二才が。よくそんな事を言えたものだな。まあいい、暇つぶしぐらいにはなるだろう」

カルラドは腰の刀に手を掛けた。

その頃、レアシム支部から程遠くない街、ホヌイクシティ。

「ロメパン、起きないね」

「うん」

その街の宿屋でクラウン等含めるヘルファングの皆がおり、ベッドで寝込んでいるルクルスを見守っていた。だが、

「しっかしあの力は何なんだ？俺の船も軽く壊して」

「自分の部下呼びに行っておいて宴会してた馬鹿狐がよく言えたもんですね」

「あ！？何だと！？」

クラウンとグースは口喧嘩を始め、

「ねえ、フィナルちゃんて好きな人とかいるの？」

「ええ、知りたい？」

フィナルとギールは井戸端会議ガールストークをしており、

「そっぴや騎士団長が婚活してるって噂本当ですか？」

「ああ、それはな…」

「え、何々？」

ヴィフォレ達も世間話をしていて、ルクルスは完璧に放置^{シカト}されていた。

そして三十分後。

「えと、とりあえずこれからどうします？」

「さあな。俺は酒場行つて来る」

「お！いいなそれ、俺も行くぜ！！」

「え、ちよつと！！」

フェルサーテとクラウンは二人で酒場に向かい、

「私達は温泉行こうか」

「そうだね」

「行こ行こ！」

女子達は温泉に向かい、

「どうする？女子風呂でも覗くか？」

「無謀な冒険はしない方がいいと思うケド」

グースとヴィフォレ、それと眠っているルクルスがその場に取り残された。

「ほう……そういや、お前新人君にあの事話したのか？」

「いいや。まだ早いと思って」

「だが新人君…いや、ルクルス…ヴァロンはもう二回も黒き雷の竜神の力を使っているんだぞ！？」

「分かつてる。それにルクルスは力をコントロールしなきゃいけないし、自分と、自分が犯した過ちにも気づかなきゃいけないんだ…」

「…？」

グースは言い掛けた時にとある疑問を感じた。

（あの時ルクルスは二つともオリジナルと言っていた…確かルクルスは力や血筋だとかに關しては知らない筈……）

「おいグース、どうした？」

「いや……別に、な」

「そうか？」

「ああ……………」

沈黙が漂う。が、それは直ぐにかき消された。

「こ、此処は…………？」

「……………」

眠っていたルクルスが目を覚ましたのだ。

「ルクルス！ やつと起きたか！！」

「……………」

「おいおい黙ってないで何か言いなよ新人君」

「………… グース、俺は一体………… 何なんだ？」

再び、沈黙が漂った。

第22話 喪dレ瑠cト葉dキ濡h可ナ既ユm（前書き）

作者「今回で第二章は終了です」

第22話 喪dレ瑠cト葉dキ濡h可ナ既um

ルクルスが発した言葉の訳は、寝ている間見ていた？モノ？が原因であった。

（俺がまたルクシオになってる。これは…夢？それで俺は遊園地に？）

ルクルスは夕方の遊園地らしきところにいた。

「おい、ルツくん！！早くう！」

「え？あ、ああ」

ルクルスと呼んだのは小柄なイーブイ。黒のワンピースを着ており、首には紋章のようなネックレスをつけていた。

（…フィナル、なのか？）

「どうしたのルツ君」

「ん、いや何でも」

（あれ？夢の筈なのに何で自由に行動出来るんだ？）

ルクルスは疑問に感じつつもその少女と歩いていた。

「ねえルツ君」

「だ、誰かッ!!」

(!?)

「グガアアア!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

(な、何だ……?)

ルクルスは何が何だか分からないでいた。ようやく見開いたと思えばレミュールを何故か、追いかけているのだから。

(どうなってんだよ、何で……!!?)

「ば、化け物ッ!!」

(化け、もの………か)

ルクルスは途中にあった鏡で自分を視認し、言葉を失う。

其処に映っていたのは、まさに異形と言える存在であった。

「助けて…ルッ君!!」

(……………)

そして、再び。

「嫌ッ!!」

慈悲の無き音が、その場に、虚しく響き渡った。

「あ、は、は」

自分で声が出せるようになったときに、其処にあったのは、数秒前までレミュールだったモノ。

「アハハハハハハハハハ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

最早、その場にいるルクルスさえも。

「何故だ？何なんだ？何がシタイ？俺に何を見せたい？君は、お前は、貴様は、そなたは、あんさんは、僕は、我は、朕は、私は、わ

っちは……………！！！！！！！！！！！！！！」

そしてルクルスは目を覚ます。

そして問うた、

「俺は……何なんだ？」

٧٠

第22話 喪dレ瑠cト葉dキ濡h可ナ既ym（後書き）

作者「次回は雑談とかですね、ルクルスの休息関係無く」

フィナルの暇つぶし&次章予告

で、ルクルス達がそんな事になっていたのと同時刻。フィナル達御一行は有名な温泉に来ていた。勿論露天である。

「ふう〜、生き返るなあ」

「やっぱり温泉は露天だよな」

「コリが解れるう」

三人はのんびり湯船に浸かっている。

「それにしてもフィーちゃんって何で剣？」

「あ、それは私に合う武器が出来るまでの代用品なんだって」

「へえ」

と此処に来てもそういう話をする三人。

ちなみに三人は契りというかそういうのを済ませてるんでタメ口である（詳しくはルクルスの休息第一章終を）

「でもさあ、慣れてないのを使うのもねえ」

「うんうん」

「あ、そういえばルクルス君起きたのかな？」

「さあねえ。ま、ロメパンなら大丈夫でしょ」

と、話す。

あ、読んで下さっている皆様。今回、こんなのですよ？

「それはそれでさ、フィレちゃんって結構おっぱい大きいよねえ」

「あ、たしかに。何か秘訣とかあるの？」

「ふふふ、それはね…毎日欠かさず。。。。。。からだ!!」

「な。。。。。。から!？」

「そんなことでその、胸が大きくなるの!？」

「そう!!それと。。。。もいいとか」

「何ソレ？」

「えっ知らないの?。。。。っていうのは。。。。を。。。。で。。。。して。。。。を。。。。する事だよ」

「へえ、。。。。かあ」

と、まあ色々規制しなきゃいけないワードが飛び交う。。のとは属にいう「ホニヤら」だとか「ピー！」だとか「バキューン!!」などでお願ひします。

もう一度言いますけど、今回こんなのばかりですよ？

「あーあ、私にももう少しあればなあ」

「そうだよねえ、後ちよつとあれば……………」

と、フィナルとギールは愚痴る。

「あはは、二人とも気にすることは無いよ。まだ成長途中なんだし」
「嫌味に聞こえるんだけど」

「同意見」

「ええ……………本当に」

「……………」

と三人も話に割り込んできたのは色違いのサーナイト。二人に共感しているが、自身は結構な巨乳。

「ま、まさかあなたに「あ、ご無沙汰していますラフスの姐御」

「姐御は止めてよねえ」

そう、この小説でも久々の登場である人気ミュージシャン、ラフスである。

「ええ！？あのラフスさんですか!？」

「フィーちゃん驚きすぎ。ラフスさんは私達より何期も先輩だよ？
そうだよねフィレちゃん」

「そう！姐御はラグーア騎士団の元騎士なんだ」

「だから姐御は止めてよね。というかもう引退したし」

「へえ、ラフスさんも騎士……………」

そんな世間話が結構続いた。

「で、何でラフスさんは此処に？」

「今更聞くのね…えと、プライベートをやつかな？」

「珍しいですね、姐御が休暇をとるなんて」

「まあね。それじゃ、私はここで御暇させて貰うわね。のぼせちゃ

って」

ラフスは去っていく。

「さあて、私達も出ようか」

「そうだね」

「あ、そうだ。この後買い物行かない？」

「賛成！行きましょ」

三人も温泉を後にする。

で、商店街。和風な雰囲気が漂う場所であった。

「よし、何処から行く？」

「あ、あそこいいんじゃない？」

「行こ行こ」

そんな感じで三人の暇つぶしは続くのであった。

フィナルの暇つぶし 終

次章予告!!

ここでは第三章の台詞やらなんやらが飛び交うだけの、あれです。
色々想像してお楽しみ下さい。

「やはり貴様であつたか。まあいい、相手が誰だろうとも俺は手加減などしない!!」

「命刻々時の針」止まりはせぬよ、何時までも」

「私達には死の概念など要らないですよ」

「そんなちっぽけなモンの為に俺は生きてるんじゃ無い!!」

「残念だけど、君に出来るのは大人しく死んでもらう事なんだよ。
新人君」

「これで遂に白焰玉が手に入る…!!」

「天響きし黒雷撃　？の金切り唄!!」

「？命刻々？ていうのはな、ニンゲンが己の現実から逃げる為に作
り出した平行世界パラレルワールドへの片道切符なんだよ」

「短かったけど、それでも一緒にいれて楽しかったよ、グース君…」

「てめえだけは絶対に許さん。ギールの分もてめえにぶち込んでやる!!!」

「お前は……誰、だ？」

「忘れたのルツ君。私だよ、レミユール、だよ？」

命刻々　　ゝ白き焰と黒き雷　　第三章　長針は戻ル　近日スタート
！！

フィナルの暇つぶし&次章予告（後書き）

ル「最後のはなんだ？」

これからやるよ

ル「てか前よりスケールダウンしてるし」

まあ、ちょっとしたものですからね。では次回もお楽しみに！！

第23話 半纏（前書き）

ル「もはやサブタイ手抜きだろ」

作「気にしない気にしない」

グ（このやり取り前にもあった気が…？）

第23話 半纏

ルクルスの言葉。それだけでその場は沈黙した

「気がついたのか、よ、良かった」

「惚けるなよ、知ってんだろう？てめえも、先輩も。俺が、一体何なのかを」

そう、問う。

「何の事だ？俺らはそんな事s「レミユールって、誰だ？」

「「！！」」

「ほらな、知ってんだろ？だからさ、教えてくれよ、一体、一体俺は何なんだよ？」

「…………はつきりと言える事は、君が普通の魔獣では無い事」

「ヴィフォレ！！」

「俺に任せろ」

ヴィフォレはグースの静止を跳ね除け、続ける。

「白き焰の神竜と黒き雷の竜神は知っているか？」

「伝説の二体の竜、だろ。だがそれは伝説」

「そうだ、伝説だ。が、それを利用した者がいた」

「！？」

「その名は観柳 柏。みやなぎかしわニンゲンの科学者だ。柏博士は幼少の頃より

その力に憧れていた。そして科学者となりその夢を叶えた。創ったんだ、英雄を」

「どういう…？」

「二竜に一番近い魔獣がいる。その名を、レシラム、ゼクロム。それらの精神が封じ込まれた宝玉から力を抜き取り、魔獣に移植させた。魔獣にした訳はきつとニンゲンには許容しきれなかったからだと思う」

「…へ、へえ」

ルクルスはだいたい気づいたのか少し苦笑する。

「ま、もう分かるだろう。そう、君はその力を移植された魔獣の子孫なのだあ――！」

パツパラアという音がなりそうな感じのテンションでヴィフォレが言った。が、勿論静まり返る。

「……で？」

「で、つて？」

「それが俺の蒼い雷の訳は分かった。それで？俺はレミユールというイーブイの女の子は一体誰なんだと聞いているんだが？」

「それはまーだ無理」

ヴィフォレは軽く笑う。

「何でだ！？」

「ほらだって、俺は君が普通の魔獣では無いと言ったけど、その子に対する返答はしてないじゃん」

「なっ……！！」

「ま、その内分かるでしょ？んじゃ俺も風呂行つて来るからヴィフォレはそう言つて立ち去る。」

「俺も行ってくる」

「おいグース！！待ちやがれ！！」

「明日、ラグーアに帰るんだから用意だけはしておけよ」
グースもふらつと立ち去る。

「…………観柳？それって確か……」

『ヴォトクシア帝国軍筆頭軍師及び丞相、観柳 紅葉クレハと申す者で御座ひます。以後、お見知りおきヲ』

ルクルスはある時会ったユキメノコの名前を思い出す。

「観柳 紅葉……か。柏博士と何の関わりが……？」

疑問に感じつつも、ルクルスは自分の荷物をまとめていた。

その頃、レアシム支部から程遠くない、紅葉が謎の人物と出会った廃墟の洋館では。

「あらお帰りなさい紅葉さん。あら？コーネリシアさんは？」

「あの者なら死にましたよ。黒き雷を受け継ぐ者に殺されてしまわれましたので」

「へえ、アレに……まあいいですわ。それよりも例のものを」
「もう持つて来てゐますよ？」

紅葉は手に持つている小瓶をテーブルに置く。

「ふむふむ……中々ですねい。最近迷魂はぐれもんが少なくて困っていたのですが、これなら子ども達に食べさせてあげられそうですわ」

「わーいご飯だあ！」「ごはーん！」

まわりの炎は嬉しそうにはしゃぐ。が、それは小さな蠟燭。顔らしきところにある黄色い眼。ろうそくポケモンのヒトモシ。そしてその中央にいる者は

「ふふふ、相変はらずですね、死神デシアン」

「貴女には関係の無い事で御座いましょう？」

橙の炎、シャンデリアを思わす姿に眼。それには何かしらの恐怖が漂う。いざないポケモン、シャンデラの色違い。

デシアンと呼ばれたそのシャンデラは不適に笑っている。

「さふですか？てつきり取り分を他の奴に盗られてイライラしてゐると思つてゐたのですが」

「パールベリトで御座いましょう？その他の奴というのは。アイツは何を考えているのか分かりませんよ」

デシアンはふうと溜息を吐く。まわりのヒトモシもそれを真似してフウと息を吐く。

「ふふふ、さふゐうもので御座ひませふ」

「まあいいですわ、とりあえず私はこれで」

デシアンはそう言つと、ヒトモシ達と共に消えた。

「それにしても、冥界との交流に何の意味があるので御座ぬませうか……？」

紅葉はスッと屋敷の奥へと歩いていった。

カルラドは未だヴァーツと戦っていた。

「くっ……」

「そろそろ、もう終わりか？」

「……？お前こそ、もう終わりか？俺はまだ本気の5%も出してはおらんが？」

「な、ふざけたことを……！？」

言い終わる前にカルラドはヴァーツの首元に刀を持ってきていた。

「お望みならばせいぜい20%ぐらいは出しても構わんが？」

「ちっ、舐めやがつて……！どうせなら100%できやがれ……！」

「……いいんだな？」

「え？」

カルラドは確認する。

「本当にいいんだな？もう命乞いはできないぞ」

カルラドは懷から別の刀を取り出し、鞘から抜いた。その刃はまるで……

「妖刀狂い骨。さあ、どうしてくれようか？」

おぞましく呻く、骨の如く。

第24話 消失と骨（前書き）

作「約一ヶ月ぶりの更新です」

第24話 消失と骨

カルラドは得物を逆手に持ち、構える。ヴァーツも自身の鎖を持って構える。

「奇奇妙妙奇奇怪怪 在らんモノが怨みの狂い骨 井戸から覗き発狂せれば何ともの申す？ 狂蘭白菊！！」

カルラドはそう言い放つと刀を上空に放り投げる。すると、刀は二つ、三つ、四つ…と幾多にも別れ、うねりてヴァーツを突き刺そうとする。

「りゅうのはどう！！」

ヴァーツはそれを跳ね返そうとりゅうのはどうを放つ。が、しかし刀は勢いを衰えさせず突き進んでくる。

「ちっ、こうなりや、螺旋縄鎖らせんじょうさ！！」

ヴァーツは鎖を螺旋のように飛ばし、刀に巻きつけ、地面に落とす。

「どうだ！！」

「甘い、それに青いな」

「何だと！？何処に居やがる！！」

其処にカルラドはいない。ただ、コツコツと下駄の音が響く。

「狂い骨、その得物の名の由来は井戸に浮きでし怨みの白骨。貴様はまだ井の中を覗いてしまった、もう二度と戻る事は出来ない。永遠に井の奥深くで苦しみ」

「な、如何いうk！！」

ヴァーツは自らを見て、恐怖する。

ヴァーツの身体は骨と化していた。

「あ、ああ…」

崩れていく、身体。落ちた先は井戸。井戸。井戸。井戸。また落ちる。

骨しかない。まわりには。骨、骨、骨。

これがあの世なのだろうか。こんな息苦しい場所が。

自身では分からない、だが、ただ、ただ、虚しいのだ。とても。

「これこそ、井中の虚しき白骨なり。延々と続く虚しさが過ぎ去ったときには、お前はもうすっかり骨だけになっているのだろ。いい暇つぶしを、有難う」

カルラドは得物を懷にしまい、歩き去った。

その頃、いや翌日。ホヌイクシティ、ルクルスたちが泊まった宿屋前。

「さてと、皆揃ったか！！」

「「おう……」」

「暗ッ！！」

あまりの暗さに驚くグースであつたが、咳をして誤魔化す。

「で、では先ほどお話致したように、クラウン殿は自分の船でお帰り下さい。支部長殿は私達と共に本部へ」

「了解した」

「では、丘に飛行船を停めておりますので、支部長殿はお先に」

「分かった。クラウンにも少し話がある、途中まで来い」

「……はあ、分かったよ」

フェルサーテとクラウンは丘の方向へと歩いていった。

「で、皆はどうした」

「「もう少し温泉に浸かって居たかった」」

「う……で、ヴィフォレは？」

「女湯覗k……いや、別に」

あからさまである。

「……あの、今回は観光じゃあ無かった事ぐらい分かっているよな

？約一名修学旅行あるあるにありそうな事しかそうしてたけど」
「……で、新人君は？」

そう言ったのはヴィフォレ。明らか誤魔化しである。

「ルクルスは先に帰らせた」

「！？」

「……では、解s「ちよつと待つてくださいー！！」」

「どうした、フィナル」ティナータ」

「ルツ君は何故そういう、特別というか危険物のような扱いをされているんですか？」

「別にそうではない、ただ単にだ」

グースが別方向を向いてさらっと言う。

「ただ、単に？意味が分かりません！！私はルツ君がどうなったt
各自、飛行船へ」

グースはそう言うのと、歩き去る。

「ちよつと待つてくだs「フィーちゃん、行こう？」」

「……う、うん」

フィナル達も飛行船の方へと向かう。

三時間前。

「ルクルス、もうそろそろ出発d……！！？」

グースが部屋に入ると、其処にルクルスの姿は無かった。

「おいルクルス！！何処だ！！」

そう、ルクルスはいなかった。

だから、グースは、先に帰ったと言ったのであった。

第25話 鍛え直し

「痛た……て、此処は何処だ？」

ルクルスが目を覚ました。辺りは暗く、方向感覚が掴めない。何も無く、ただ空しい空間が広がっているだけ。

「あゝ、テス、テス……。おうい、ルクルス、起きてるか？」

「その声……クラウンさんですか（汗）」

「お、起きてんだな？なら話は早い」

何やらクラウンらしい声が何処から聞こえてくる。おそらくスピーカーなどが此処にあつて、何処からか此処に音声を発している。

「なんですか？人を？誘拐？しておいて」

「人聞きの悪い言い方すんなよ、よく漫画とかである定番な展開だと思っただが？」

「如何いう？」

多少苛々しながらルクルスは聞き返す。

「主人公が己の弱さに苦悩して、己より強い者に頼み込んで秘密の特訓をする、みたいな？例えばb」

「分かりましたから、版權上というか著作権的なものに触れようと
するのだけは止めて下さいッ――！」

ルクルスが焦って静止すると、少し経ってから辺りが明るくなった。

「……んじゃ、やりましようか。俺なりの海賊版騎士修練」^{トレーニング}」

「え……………！？」

其処には、何十人いるであろうかというぐらいの、クラウン達がい
た。

「あ、お帰りなさい！！大丈夫でしたか？ムトナさん」

ラグーア騎士団首都本部一階、受付。受付嬢らしきタブンネが、ある者に声を掛けた。

「ああ。俺は大丈夫だったが、他の騎士は全滅だ」

「そ、そうですか…皆さんお強い筈なのに…」

「それ程だった訳だな。だがもう手遅れだ、仕方が無い」

それは、冥界でバルベリトに乗っ取られた、ムトナであった。

「報告をしたいんだが、騎士団長はいるのか？」

「い、いえ。筆頭軍師様と一緒に何処かへ行ってしまったわれたようです…」

「そうか。なら戻るまで待っていていよう」

ムトナは近くの椅子に腰掛ける。

「何か食べますか？オボンのゼリーなら体力も回復しますし…」

「そうだな、貰うでしょう」

「はい。ではい」

タブンネはその瞬間に肉片となり、そして跡形も無く消え去った。

「貴様の肉と魂をね」

ムトナの裏で、バルベリトはタブンネだったものを噛み砕くとそう呟き、自身の翼を広げた。

第26話 停滞地域

ルクルスは啞然とした。辺りはクラウンだらけだからだ。それに実際ろくな説明も受けてはいない。

「まずは俺のこの分身体コピーを倒してもらうぜ」

「分身体？二人目クローンじゃあ無いんですか？」

「二人目じゃあないな。分身体というか、二重陰ドッペルゲンガーというか、霊体ゴースティというか。まあ俺本体じゃあ無いことだけは確かだな。気をつけていけよ、こつちにダメージはしっかりとくるが、お前にもダメージを与えられるようになってるからな。ほら、お前先攻だ」

クラウンの分身体は一斉にルクルスを指差す。

「えと、じゃあやらせて頂きます！！」

ルクルスはその答えると、自分の横に置いてあつた自身の黒槍を持つて一番近くにいたクラウンに槍を突き刺す。が、

「効かない効かない」

「え、貫いたはず……？」

槍で突き刺さつた部分は何故かそのまま穴が開いて、受けたクラウンは平然としている。

「あ、忘れてた。コレ、お前の電撃か、それを纏つたもんじゃあないと消滅しないから」

「そんなのアリですか！？」

「アリだ。言つたろ？霊体というか、つて。それにこれはお前専用の特別なモンだし」

「特別か……」

「んじゃ、今度はこつちからだ。全部避ければ問題無いが、殺傷能力は俺自身の九倍だから、一回でも直撃したら死んじまうし、掠つたとしても、致命傷ぐらいだぜ？」

「ちょ、ええ！？」

クラウン達は言い終わる前にルクルスに襲い掛かってきた。

「「ほらほらア、電撃だぜ？」」

「最近は技なんて使ってないから厳し…うわッ!」

「「ほら避ける!」」

ルクルスはクラウン達の攻撃を何とか避けながら、チャンス機会を伺う。

「「おおつと？」」

クラウン達の動きが何故か一瞬止まった。ルクルスはその隙を見逃さず、

「今だ、?ほうでん?!」

全身から電気を放出する。その蒼い雷はクラウン達を飲み込んだ。

「終わった…?」

『んな訳あるかッ!! システムの故障だ。ただの偶然。終わりなんかじゃあない、少し待ってろ』

ルクルスは脱力して、その場に座り込んだ。

カルラドはシャード等に合流し、霊鳥の石があるという山へ向かっていた。

『そろそろ着く』

「分かりました。カルラド、用意はいいですか？」

「何のだ? ただの採集だろ？」

カルラドは大きな欠伸をする。

「まあ、そうなんですが…」

『見えてきたぞ。あれが霊鳥の石があった場所、不死の山、富士山だ』

山の山頂は、霧に包まれていた。

とある記録

私は、ただ欲しかったただけなのだ。

いつも満たされない心に出来た穴を埋める為に、ただ欲しかっただけなのだ。

いつも私は独りぼっちだった。

親に捨てられ、友に裏切られ、世間からも見放され、ただ私に残ったのは、愛する？ヨミ？だけだったのだ。

いつも愛くるしい笑顔を絶やさないヨミは、孤独な私にとって唯一の支えであり、満たすものだったのだ。

その瞳は私にとって、絶望を写す鏡でしか無かった。

満たされていた私のが徐々に汚されていく気がしてならなかった。吐き気がした。

憎かったわけではない。邪魔だったわけではない。ただ、ただ怖かっただけなのだ。

変わってしまうことに対して、変わらない瞳が其処にはあって、ただいつもそれに呑みこまれてしまう気がして。

いうつも其処にあった瞳は、いつの間にか、単なる騒音ノイズでしかなくなってしまった。

何かが違う。これでは埋まらない。

私という時計の歯車に異物が入り込んでしまっている。

これでは針は動かない。

私という時計はこのままでは命という時を刻まずに壊れてしまう。

それでは駄目なのだ。
永遠に刻まなくては、時計ではない。ただの？もの？でしかない。
ヨミでは駄目なのだ。結局は人間なのだ。もっと尊いものでなくてはならないのだ。

魔獣ではどうだろうか。

まだ未知の可能性を秘めている魔獣ならば、この時計は動くのだ。
そうだ、そうしよう。人間を一度崩して魔獣に再度組立て直そう。

駄目だ。崩している間に壊れてしまう。

これでは組立てられない。やはり足りないのだ。まだ何か足りないのだ。

上手く組み直すにはこんなちっぽけなものじゃあ駄目なのだ。もっと命溢れるものの血肉、臓腑、脳髄、それがなければ結局はただのものでしかないのだ。

埋まらない。埋まらない。埋まらない。これではちっとも満たされない。

嗚呼、これでいいんだ。これで命を刻める。永久に満たされ続けられるのだ。

第27話 無と云う（前書き）

ル「最近短いよな」

作「んまあね」

ル「夏休みなんだし、もう少し頑張れよ……」

作「やれたら……ね」

ル「……やれよ」

第27話 無と云う

ルクルスは、何故か修理をする羽目になっていた。

「暑い…何でこんな事を俺がしなきゃならないんだあ……」

必死に火花が散っている機械に向かってペンチやら何やらで修理している訳は、勿論クラウンが原因である。

数十分前

『えとさ、お前が直してくんない？』

「は！？何故に！？」

『いや、俺楽しい楽しい新作のg…用事があるからさ。ね？』

「ゲームで言おうとしたろ（怒）」

『何のことかい？んま、工具はそこにあるし、そつちから直せるからよろしく頼むわ。待ってる俺のド。○エー！』

「ギリギリだなあれ……（汗）」

~~~~~

で、現在に至る。

「面倒だ…そもそも勝手に連れてきておいて、それでいて修理作業などと……！！」

そんな時、ルクルスが良いのか良くないのかよく分からない考えを思いつく。

「逃げちまうか」

ルクルスはその立方体の部屋に出口が無いか、探し始める。が、  
「無い…だって!？」

結果はこの台詞から分かるように、見つからなかった。

ルクルスは結局作業に戻る事になった。が、

「逃げちまうか」

再び逃走を試みる。

「この部屋壊せばいい話じゃないか？」

全くもって良くない。

「だがどうやって壊すか…」

諦めるよ。

「諦めるかな…」

で、再び戻る。が、しかし

「逃げt(ry)」

これが約二時間に渡り、繰り返されるのであった。

霊鳥の石を求めて不死の山、霊峰富士山に向かったカルラド達は、  
「寒ッ!！」

「い、言わないで下さい。よ、余計に寒く感じますから」

無理も無い。何の準備もせずに標高3776・24mの山の山頂に  
いるのだから。むしろそれで生きている方が信じられない。

「てかこの富士山ていうのはどこの山なんだ？」

今それを聞くと言わんばかりに、シャードが嫌そうな顔をする。

「北緯35度21分38・26秒、東経138度43分38・52  
秒。昔二ホンという国のシズオカとヤマナシという地域があった場  
所にあるのが此処です」

「よく分からんな。ラグーアからどのくらいの距離だ？」

「さあ？でも時差は9時間です」

「ほう。じゃあ今ラグーアは午後6時か」

「まあ、そういう事になりますかね」

カルラドは分かった感じに頷く。

『そろそろ向かおうぞ、時間が無い』

セーナムルヴが言う。

「そうですね、カルラド、行きましょう」

「ああ」

三人は雪の中に消えていった。何かを笑っているかのように、風が吹いていた。

無。それが果たして黒なのか、白なのか。  
そんな空間で空しく手毬唄が響いていた。

「命刻々 時の針 戻ル長針 見つめてる てんてんてんころ 点  
々半纏 血だらけ 斑点 骨だらけ

命刻々 夢の針 折れぬ短針 重ねてる てんてんてん  
ころ 点々脳髓 眼だらけ 曇天 人だらけ

命刻々 末の針 進む秒針 ひたすらに  
てんてんてんころ 点々盲点 あばらけ 陰険 物だらけ

てんてんてんころてんころり てんてんてんころてんころり……」

「またやっているのか？」

何かが聞く。

「勿論。だってもう直ぐなんですよ？」

何かが問う。

「ああ。後は？白焰玉？があればいいだけだ。十分な魂はある、後は形成するだけだ」

何かが答える。

「そうなんだ、楽しみ」

何かが嬉しそうに答える。

「そこまですて会いたいのか？」

何かが聞く。

「うん、ああ、早く会いたいな……」

無。それが果たして黒なのか、白なのか。

「待っててね、ルツ君……」

## 第28話 口下手口車

『今日はここまでッ！！今夕飯運ぶからちよっと待ってる？』

それを聞くと、ルクルスはその場に倒れこむ。

「やつ…と、終わったあ……」

『ほう。終わったねえ。後千体倒すんだぞ？』

「マジかよ…」

ルクルスはより疲れた顔をする。

『準備完了！！背景変更！！』

「え？何ですか？」

轟音が響く。すると何にも無い白い床は畳に、壁は障子が張られ、何とも和風な部屋となる。

「んじゃ、食おうや」

「え？何が…如何いう？」

いつの間にかクラウンが御膳と共に其処にいた。

俺は何が何だか良く分からずも白飯を夢中に貪り食っていた。

白米は噛めば噛むほど甘みが増していき、食欲を増幅させる。黒

胡椒をふりかけたらもっと美味そうだ。

「よく食うな、お前」

クラウンさんが呆れた感じで言った。

「勝手に連れてこられて、無理矢理何かやらされて、こっちはもうグッタグタなんですよ」

「へいへい」

「それに、この特訓まがいは何の意味があるんです？」

「うんうん」

絶対コイツ相槌してるだけだ。

俺は少タイライラしながらも、黙々と白米を口に運ぶ。

そうしている内に、頭の中にとある単語<sup>ワード</sup>が過る。

命刻々。

自分でも意味は分からない。だが、聞いたことのある単語であることは確か。

今の時間が気になった。

だがこの部屋に時計は存在しない。朝なのか夜なのか、それも分からない。

「あ、そうだ。お前、許嫁……というか彼女。いや、結婚を前提としたお付き合いをする女性っていうべきか。欲しくない？」

「んッ！？な、何言っているんですか！？」

急にそんなことを言うから米が一寸詰まってしまった。

「ぬふふ。で、どうだ？欲しくないか？」

「で？じゃないですよ！！そそそそういうのはお互いが相思相愛でその…あの……」

「欲しいのか欲しくないのか聞いているんだがな？」

というより何故この話になった。

「それにしたって、そんな人いるんですk「いるんです。俺の義妹です」

義妹で。

「べっぴんさんだぞ？お前と同年だし、気が合っんじゃないか？」

それだったら、フィレンツェさんもいる……

って、何でフィレンツェさんが出てきたんだろ。

「とにかく嫌ですよ。義妹さんってことはクラウンさんの義弟にならなきゃいけないですか」

「嫌か？」

「嫌です」

ちえ、つまんない。と、クラウンさんは言った。  
てか面白半分でそういうのは駄目でしょうな。

「つーことでお断りしますからね」

「へーい」

俺は黙々と白米を口に運ぶ。

その話を終えると、ルクルスは再びクラウンの分身を倒し始める。  
クラウンはその様子を地上のモニタから観ていた。

「順調だな…」

「順調じゃなきゃ困るぞ」

隣でフェルサーテが言う。ルクルスを連れてきたのはこの二人だ。

「それに、間者の情報によれば帝国軍が再び襲撃を目論んでいるらしい。早くしなければ…!!」

まあ待てよ、とクラウンが言う。

「大丈夫だろう。本部にはブエリースやシャードの弟子の…グースだっけ？ソイツもいるし、他にも第九小队のヴィスケットや第八小队のラルヴィレもいるんだぜ？カルラドの言う事を信じて、俺らはコイツを強くする事だけを考えてればいいじゃねえか」

「そうは言うがな。アイツの言う事を鵜呑みにし過ぎじゃないか？この前の時も、お前に手出しをさせないようにと言ったらしいじゃないか」

クラウンは溜息を吐いて、それから言う。

「いいじゃねえか。十五年の中なんだし。腐れ縁だろ？それとも…」

「…？」

「ばっ、馬鹿か！！別に俺はアイツを信じていない訳ではないが…」

「…」

クラウンは見透かしたように、

「ほう。訳ではないが、カルラドは？<sup>アイツ</sup>元ヴオトクシア帝国軍七将？だから、か？」

「……………」

クラウンは、ニヤツと笑った。

## 第29話 覚醒的俗世

富士山火口付近。カルラド達は引き続き靈鳥の石を探していた。

「靈鳥の石、か。どんな病、怪我でも治してしまうという三種の獣神器の一つ」

「ええ。今更何を言ってるんですか」

「確認だよ。で、その内の一つである蛇神の鏡はラグーア王国にあるんだよな」

「はい、そうです」

『ほう？ということはクランベに会っているのか』

「？」

「それは、ケツアルコアトル殿のことです」

『ああ、そうだったな。献体名「ケツアルコアトル」か』

最後の方は小さく、二人には良く聞き取れなかった。

「に、してもだな。どんな形か分からないんじゃないやなあ」

「大昔、この山とある薬が焼かれました」

「は？」

「その煙は天に昇り、雨となってこの山に降り注いだ。そして、この山は噴火した。その時噴出した溶岩にそれは混じり、そのまま山の奥深くへと沈んでいった。それから幾年と時間が過ぎ、生まれたのが通称靈長の石」

「通称？」

「ええ。またの名を蓬萊の玉<sup>ほうらいのたま</sup>。徐福が探したといわれる靈薬です」  
セーナムルヴは頷く。が、学がほとんど無いカルラドは首を傾げている。

『その能力は不老不死とはほぼ無縁の存在だな』

ええ。とシャードは言う。

「とにかく、急ぎましようか」

三人は再び、歩き始めた。

ルクルスⅡヴァロン。本名をルクルス・ナベリ・レンジアⅡヴァロンという。

彼は幼い頃に両親を無くしてから、とあるリーフィアに育てられた。

そのリーフィアも彼が七歳のときに？凍結病？という当時問題となっていた不治の病に罹り、この世を去る。

彼は再び孤独で生きる事を余儀無くされた。

元々彼は人見知り、というよりも人と関わることを避ける傾向があった。

それもあつてなのか彼はクラスの中でも孤立し、いじめの対象となる。

そして、あの日。

『よーわむしっ！よーわむしっ！泣き虫ルクルス役立たず！』

『よーわむしっ！なーきむしっ！ルクルス何か死んじまえ！！』

『おうおう、そうだ。もっと言っちゃまええ！コイツみたいな世間の

「ゴミッ屑何か、死んだ方がこの世の為なんだからよ！ケツ！！」

『化け物だ！！』

『ばーけものっ！ばーけものっ！化け物ルクルス死んじまえ！！』

『ばーけものっ！ばーけもの！バーケモノ！………』

『———化け物』

あの日、彼をいじめていた者の三分の二である86人の生徒が両目と四肢を失い、出血多量などで死んだ。  
ルクルスⅡヴァロン、十歳の秋であった。

一体どれだけのクラウンを倒したのだろう。

そう思いながらも、ルクルスは未だクラウンを己が最も嫌う己の雷で葬っていく。

『はい終了!!』

「？」

クラウンの声が響いた。

『倒しすぎだ!!結構俺も傷つくんだよ!?!』

「じゃあ何で自分にしたんですか……（汗）」

『るっさい!!ほら、次行くぞ次!!』

「今ので終わりじゃないんですか!?!」

『んな訳あるか!!』

怒号が響く。

「と、いう訳で。ルクルス様、次は私と勝負するらしいですよ?」  
というワケで随分と久しぶりに登場のセシル「クレフランス（詳しくは資料室参照）」。

「セシルさん、僕に敬語は要らないですよ?」

「いえいえ、私はルクルス様の部下。いずれはルクルス様の右腕、そしていずれ率いられるであろうルクルス小隊の一員として、私は言っているので御座います」

「しょ、小隊で……」

飛躍し過ぎている。

『おい、はーやく始めてくれよ』

「という事らしいので、誠心誠意殺らせて頂きますよッ!!」

そついうと、セシルはルクルスにその鋼鉄の翼で襲い掛かった。

ルクルスは少し出遅れつつも、自身の槍でその猛攻を防ぐ。

「?かげぶんしん?」

セシルは己の虚像を幾つも作り出す。

「邪魔だッ」

ルクルスは槍に自らの電気を纏わせ、数体ずつ薙ぎ払う。

「『まだまだ』」

セシールはより虚像を増やす。

ルクルスは気にせず槍や、チャージビームなどで虚像を消していく。

「（…これじゃあキリが無い…ッ！…どうにかして本物のセシールさんを見つけ出さないと…！！）」

ルクルスは冷静を取り戻すため眼を瞑る。

止まってしまったルクルスに、セシールは声を掛けようとするが、クラウンが『止める』と言われ、引く。

そして、ルクルスは眼を見開く。

が、その眼は黒く染まり、表情が読み取れない。

「なっ、ルクルス様！？」

「大丈夫です。ただ、良く見えるようになっただけですよ」  
そう言うと、

「ただ、敵襲みたいだ…ッ！」

ルクルスの眼にはこう映る。

一面の黒い空間。其処にセシールの形をした白い模様が映し出される。

他の方向を向くと、ミロカロスの形をしている白い模様が幾つも見える。

この外は如何やら海らしい。が、

ミロカロスたちは此方を向いている。

模様も妙に揺らいでいる。

これからルクルスはミロカロスたちが敵であるということに気づ

き、さらに自分の眼にリーダーのような能力が付加した事も理解した。

そして、臨戦態勢をとってこういったのである。

「ただ、敵襲みたいだ…ッ!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3082n/>

---

命刻々～白き焰と黒き雷～

2011年11月9日21時03分発行